

2024年度（後期）学業成績優秀賞

【 大阪市立大学 】

学部	学科	氏名
商学部	商学科	村田 大空
経済学部	経済学科	正田 真夕
法学部	法学科	大西 渚詩
文学部	哲学歴史学科	三井 梨央奈
理学部	地球学科	今井 琉雅
工学部	機械工学科	田井 寛人
医学部	医学科	西浦 嵐
医学部	看護学科	木ノ下 莉子
生活科学部	居住環境学科	多田 彩夏

2024年度（後期）白鷺賞

【 大阪府立大学 】

学域	学類	氏名
現代システム科学域	知識情報システム学類	松井 瞭
現代システム科学域	環境システム学類	喜多 まい
現代システム科学域	環境システム学類	岡村 瞳
現代システム科学域	環境システム学類	小松 薫子
現代システム科学域	マネジメント学類	池田 直哉
現代システム科学域	マネジメント学類	西川 陽菜乃
工学域	電気電子系学類	牧埜 利樹
工学域	電気電子系学類	小林 大祐
工学域	電気電子系学類	平内 陽喜
工学域	物質化学系学類	中谷 健人
工学域	物質化学系学類	佐々木 陸翔
工学域	物質化学系学類	清水 創太
工学域	機械系学類	木村 泰士
工学域	機械系学類	谷口 嘉希
工学域	機械系学類	伊藤 成穂
生命環境科学域	獣医学類	今井 咲帆
生命環境科学域	応用生命科学類	瀬川 奈緒子
生命環境科学域	応用生命科学類	松本 帆夏
生命環境科学域	緑地環境科学類	森田 光咲
生命環境科学域	理学類	杉本 泰祐
生命環境科学域	理学類	和田 明莉
生命環境科学域	理学類	竹田 佳生
生命環境科学域	理学類	松下 葵
地域保健学域	看護学類	上野 愛菜
地域保健学域	総合リハビリテーション学類	三浦 志穂
地域保健学域	総合リハビリテーション学類	谷本 優菜
地域保健学域	総合リハビリテーション学類	武木田 さくら
地域保健学域	教育福祉学類	福村 菜月

2024年度（後期）研究業績優秀表彰

【 大阪公立大学 】

所 属	専攻	氏 名
現代システム科学研究科	現代システム科学専攻	川口 周一郎
文学研究科	哲学歴史学専攻	劉 泳如
文学研究科	人間行動学専攻	永延 佳那子
文学研究科	文化構想学専攻	呉 晨慧
法学研究科	法学政治学専攻	章 禕亮
法学研究科	法曹養成専攻	秋山 真太郎
経済学研究科	経済学専攻	皆川 夏奈
経営学研究科	グローバルビジネス専攻	鏡堂 秀一郎
都市経営研究科	都市政策・地域経済専攻	中筋 由規
情報学研究科	基幹情報学専攻	小西 豪
情報学研究科	学際情報学専攻	松浦 碧
理学研究科	数学専攻	安福 蛍汰
理学研究科	物理学専攻	富永 悠
理学研究科	化学専攻	小林 来生
理学研究科	生物学専攻	三村 萌音
理学研究科	地球学専攻	岸田 明生
理学研究科	生物化学専攻	吉良 凌一
工学研究科	航空宇宙海洋系専攻	平山 裕也
工学研究科	機械系専攻	河内 竜太郎
工学研究科	都市系専攻	石黒 陽菜
工学研究科	電子物理系専攻	初岡 涼平
工学研究科	電気電子系専攻	西本 賢司
工学研究科	物質化学生命系専攻	菅沼 美里
工学研究科	量子放射線系専攻	森 祐輔
農学研究科	応用生物科学専攻	Keo Sophaneth
農学研究科	生命機能化学専攻	北村 心
農学研究科	緑地環境科学専攻	山本 真夕
医学研究科	医科学専攻	川畑 杏佳
リハビリテーション学研究科	リハビリテーション学専攻	東條 拓海
看護学研究科	看護学専攻	細川 桃子
生活科学研究科	生活科学専攻	小田 裕平

2024年度 後期学長表彰（個人）

【 大阪公立大学 】

所 属	学年（卒業生は在籍年次）	氏 名
現代システム科学研究科	博士前期課程/1年	三石 宏大
現代システム科学研究科	博士前期課程/2年	日下 安里紗
文学研究科	博士後期課程/2年	中納 雅司
文学研究科	博士前期課程/2年	小林 右京
文学研究科	博士後期課程/1年	石 善栄
経済学研究科	博士後期課程/3年	王 子言
経営学研究科	博士後期課程/2年	荒巻 勝
情報学研究科	博士前期課程/2年	谷口 弘通
理学研究科	博士前期課程/1年	永本 泰斗
理学研究科	博士前期課程/1年	横山 愛夢
理学研究科	博士前期課程/1年	吉川 真太郎
理学研究科	博士前期課程/1年	吉野 優季花
理学研究科	博士前期課程/1年	山田 恭佑
理学研究科	博士前期課程/1年	玉置 喜大
理学研究科	博士前期課程/1年	貫上 晃宏
理学研究科	博士前期課程/2年	清水 佑馬
理学研究科	博士前期課程/2年	吉良 凌一
理学研究科	博士前期課程/2年	名古 竜二郎
理学研究科	博士後期課程/1年	Tran Tung Lam
理学研究科	博士後期課程/2年	佐藤 龍
理学研究科	博士後期課程/2年	Ibrahim Mohammed Danlami
理学研究科	博士後期課程/3年	植田 允教
工学研究科	博士前期課程/1年	大崎 歩乃花
工学研究科	博士前期課程/1年	本郷 拓大
工学研究科	博士前期課程/1年	林 秀汰
工学研究科	博士前期課程/1年	盛屋 匠
工学研究科	博士前期課程/1年	王 佳怡
工学研究科	修士前期課程/1年	木川 廉
工学研究科	博士前期課程/1年	西村 恵
工学研究科	博士前期課程/1年	請関 優
工学研究科	博士前期課程/1年	浪瀬 敦夫
工学研究科	博士前期課程/1年	西井 翔馬
工学研究科	博士前期課程/1年	福居 諒
工学研究科	博士前期課程/1年	竹内 洸稀
工学研究科	博士前期課程/1年	山下 美里
工学研究科	博士前期課程/1年	薄川 翔太
工学研究科	博士前期課程/1年	橋井 貴士
工学研究科	博士前期課程/1年	和田 佳成太
工学研究科	博士前期課程/1年	山本 幸永
工学研究科	博士前期課程/1年	服部 冠志
工学研究科	博士前期課程/1年	高橋 美郁
工学研究科	博士前期課程/1年	齋藤 大
工学研究科	博士前期課程/1年	野村 佳澄
工学研究科	博士前期課程/1年	秋山 太一
工学研究科	博士前期課程/2年	竹内 優斗
工学研究科	博士前期課程/2年	八杉 尚樹

工学研究科	博士前期課程/2年	平山 裕也
工学研究科	博士前期課程/2年	浪川 新大
工学研究科	博士前期課程/2年	小原 伽羅
工学研究科	博士前期課程/2年	天野 由視
工学研究科	博士前期課程/2年	芝田 凌太朗
工学研究科	博士前期課程/2年	李 星宇
工学研究科	博士前期課程/2年	初岡 涼平
工学研究科	博士前期課程/2年	SHI YUTING
工学研究科	博士前期課程/2年	奥田 萌斗
工学研究科	博士前期課程/2年	服部 秀政
工学研究科	博士前期課程/2年	小泉 太護
工学研究科	博士前期課程/2年	荒川 颯哉
工学研究科	博士前期課程/2年	岩本 空果
工学研究科	博士前期課程/2年	野村 圭吾
工学研究科	博士前期課程/2年	重野 天郁
工学研究科	博士前期課程/2年	平岡 大幹
工学研究科	博士前期課程/2年	井上 義文
工学研究科	博士前期課程/2年	大橋 歩実
工学研究科	博士前期課程/2年	林 絹子
工学研究科	博士前期課程/2年	桑田 憲甫
工学研究科	博士前期課程/2年	佛圓 大河
工学研究科	博士前期課程/2年	安井 伊吹
工学研究科	博士前期課程/2年	澤田 徹
工学研究科	博士前期課程/2年	菅沼 美里
工学研究科	博士前期課程/2年	林 航昊
工学研究科	博士前期課程/2年	彭 子宸
工学研究科	博士前期課程/2年	山本 竜也
工学研究科	博士前期課程/2年	小幡 匡
工学研究科	博士前期課程/2年	世山 将大
工学研究科	博士前期課程/2年	竹田 晴海
工学研究科	博士後期課程/1年	永木 勇人
工学研究科	博士後期課程/1年	橋場 大輔
工学研究科	博士後期課程/1年	山内 悠暉
工学研究科	博士後期課程/1年	朝倉 大智
工学研究科	博士後期課程/2年	加藤 拓也
工学研究科	博士後期課程/2年	王 聞達
工学研究科	博士後期課程/2年	張 博雲
工学研究科	博士後期課程/2年	今江 章裕
工学研究科	博士後期課程/2年	鳥居 真人
工学研究科	博士後期課程/2年	入井 駿
工学研究科	博士後期課程/2年	鬼塚 貴大
工学研究科	博士後期課程/2年	今吉 優輔
工学研究科	博士後期課程/2年	巖 元志
工学研究科	博士後期課程/2年	大津 智隆
工学研究科	博士後期課程/3年	谷田 大
工学研究科	博士後期課程/3年	Aphayvong Sengsavang
工学研究科	博士後期課程/3年	嶋本 健人
工学研究科	博士後期課程/3年	井上 達貴
工学研究科	博士後期課程/3年	桐淵 岳
工学研究科	博士後期課程/3年	藤田 侑志

工学研究科	博士後期課程/3年	韓 佳虎
工学研究科	博士後期課程/3年	磯辺 茉実
工学研究科	博士後期課程/3年	濱谷 将太
工学研究科	博士後期課程/3年	関 優介
工学研究科	2024年(R6)3月修了	音野 智哉
工学研究科	2024年(R6)3月修了	重富 竜輝
工学研究科	2024年(R6)3月修了	谷垣 隼大
農学研究科	博士前期課程/1年	中村 綾那
農学研究科	博士前期課程/1年	垣内 憲吾
農学研究科	博士前期課程/1年	松本 航紀
農学研究科	博士前期課程/1年	森川 才翔
農学研究科	博士前期課程/1年	重村 愛貴
農学研究科	博士前期課程/1年	久井 花恋
農学研究科	博士前期課程/2年	吉田 麟太郎
農学研究科	博士前期課程/2年	隠田 美咲
農学研究科	博士前期課程/2年	辻本 健登
農学研究科	博士前期課程/2年	佐々木 晴紀
農学研究科	博士前期課程/2年	北村 心
農学研究科	博士前期課程/2年	今西 優斗
農学研究科	博士前期課程/2年	井上 佳穂
農学研究科	博士前期課程/2年	花井 麻愛
農学研究科	博士前期課程/2年	野上 凌介
農学研究科	博士後期課程/1年	福田 琳之介
獣医学研究科	博士課程/2年	高見 優生
リハビリテーション学研究科	博士後期課程/3年	大類 淳矢
生活科学研究科	博士前期課程/1年	神野 隼平
生活科学研究科	博士前期課程/1年	明石 実久
生活科学研究科	博士前期課程/1年	鈴木 侑佳
生活科学研究科	博士前期課程/2年	高橋 明弓
生活科学研究科	博士前期課程/2年	安田 珠実
生活科学研究科	博士後期課程/3年	西 太郎

【 大阪市立大学 】

所 属	学年（卒業生は在籍年次）	氏 名
理学研究科	学士課程/4年	檜原 友
工学研究科	博士後期課程/3年	LI SHUYANG
医学研究科	博士課程/4年	野中 允幾
生活科学部	学士課程/4年	松本 恵利香
生活科学部	学士課程/4年	北村 和津

【 大阪府立大学 】

所 属	学年（卒業生は在籍年次）	氏 名
現代システム科学域	学士課程/4年	岡山 颯太
工学研究科	2023年(R5)3月修了	木村 拓哉
生命環境科学域	学士課程/4年	木下 綾
生命環境科学域	学士課程/6年	今井 咲帆
生命環境科学研究科	博士課程/4年	吉田 拓海
生命環境科学域	学士課程/4年	二宮 蒼平

2024年度 後期学長表彰（団体）

所属	構成員/学年	団体名
工学研究科	尾崎 大晟/博士前期課程2年	-
工学研究科	天野 祥太郎/博士前期課程1年	

◇学長表彰に係る学生の学業並びに研究活動等の功績

<個人>

【大阪公立大学】

学部・学科 Faculty・Department 学域・学類 College・School 研究科 Graduate school	氏名 Name	ふりがな Furigana	推薦理由・成績（功績の内容） Reasons for Recommendation	【学会等における受賞等の場合に記入】 国際大会または国内大会 International competition or National competition ／（開催年月日 date）	その他参考事項 Others ※学術誌であれば、タイトルや大会の規模・概要などを記載してください If it is an academic journal, please include the title, scale and outline of the conference, etc.
現代システム科学研究科	三石 宏大	みついし こうだい	博士前期課程1年次に第一著者および責任著者として投稿した論文が、Top 8% Journal (2023年)である国際学術誌Journal of Experimental Social Psychologyに掲載された。		論文情報: Mitsuishi, K., & Kawamura, Y. (2025). Avoidance of altruistic punishment: Testing with a situation-selective third-party punishment game. Journal of Experimental Social Psychology, 116, 104695. https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0022103124001082
現代システム科学研究科	日下 安里紗	ひのした ありさ	右記の国際学会で行った発表が優れた内容であると評価を受け、「Best Poster Award」を受賞した。 ・演題名: Effect of Natural Snow on the Formation of Nitric and Nitrous Acids from Nitrogen Dioxide 受賞部門: Session 4: Environment, Health Sciences, and Climate Change ・内容: 雪氷上で大気中の二酸化窒素が硝酸、亜硝酸、一酸化窒素に変化すること証明し、自然雪ではその組成が変化することを示した。 ・これまでに知られていなかった現象に着目し、積雪期に亜硝酸ガス濃度が高くなる原因の解明につながる成果を提示した。超純水で作成した雪と自然雪では異なる結果となることを示すなど、新規の発見がいくつか見られた。	Conference on Earth Sciences and Sustainable Development (CESD) 2024 (2024/11/11)	【大会概要】 年に1回、ベトナム国家大学ホーチミン科学大学で開催される、国際会議です。毎年多くの外国人を招待し、招待講演が行われています。また、各研究室の活動の紹介ブースも開かれています。 【規模】 参加者数：約200人 発表数：124件（ポスター発表含む） 受賞者数：15名、うちポスター発表賞10名
文学研究科	中納 雅司	なかのう まさし	中納氏は2024年12月に①「天長・承和期における地方僧官制度の展開」（『続日本紀研究』437号）、②「国師制の実態と都鄙間交流」（『日本歴史』919号）の2つの論文を発表した。①の掲載誌は日本古代史を中心とした論文が掲載される全国誌であり、②は日本史全般を取り扱う全国誌である。ともにベテランから若手まで幅広い世代の研究者が投稿する学術誌で、中納氏の論文は、厳正な査読を経て掲載されたものである。 これらの論文は、奈良・平安時代の地方社会における仏教を、国家的な制度と僧侶の実態の両面から分析したものであり、古代仏教史や地方社会研究に重要な論点を提示したものとして高く評価されている。		・『続日本紀研究』 本年度創立70周年を迎える続日本紀研究会が編集・刊行する全国的な学術誌。研究史上重要視されるような論文も数多く掲載されてきた。年4回の刊行。なお、437号は奥付では11月刊行となっているが、編集の遅れ等により実際に刊行されたのは12月である。 ・『日本歴史』 1949年に創立された日本歴史学会が編集・刊行する全国的な学術誌。古代～近現代の幅広いテーマの論文が掲載される。月に1回の刊行で、古代史の論文は年間10本程度掲載されている。

文学研究科	小林 右京	こばやし うきょう	<ul style="list-style-type: none"> ・日本グループ・ダイナミックス学会および日本社会心理学会の2つの学会から優秀学会発表賞と若手研究者奨励賞をそれぞれ受賞した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2024年8月22日～23日に立教大学で開催されたグループ・ダイナミックス学会第70回大会において、「2024年度優秀学会発表賞」を受賞。 ・2024年度日本社会心理学会若手研究者奨励賞を受賞するとの連絡が、2024年12月12日に学会からあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本グループ・ダイナミックス学会は、約570名の学会規模で、2024年度の優秀学会発表賞受賞者は4名 ・日本社会心理学会は、約1580名の学会規模で、2024年度の若手研究者奨励賞受賞者は7名
文学研究科	石 善栄	そく そんよん	<p>今期、石氏はまず修士論文を改稿した論文「『大日本法華経験記』における普賢菩薩説話とその背景——比叡山横川の学問世界との交渉——」を国語国文学分野の代表的な査読付き月刊学術誌『国語国文』（京都大学文学部国語学国文学研究室編集、臨川書店刊）に投稿し、同誌第93巻第10号（2024年10月）に掲載された。</p> <p>本論文は、平安中期に比叡山の僧鎮源によって著された『大日本国法華経験記』に記載される、普賢菩薩が信者と一体化するという同書に特有な話柄の説話について、その形成や伝播の過程を当該説話や作品の背後に広がる宗教的環境と密接に関わらせて論じたものである。法華経信仰の陰に隠れた作品背後の多様な思想状況と伝承世界との交渉に初めて光を当て、作品理解を格段に深化させた点で当該分野の研究者から非常に高い評価を受けている。</p> <p>石氏はまた仏教文学会2024年度大会（2024年10月19日、於京都女子大学）において「鳥天狗の形成と展開——天台三大部の慢の解釈と説話——」と題する発表を行った。</p> <p>本発表は、日本中世において天狗がトビに代表される鳥の姿で形象化されることの背後に、比叡山横川の言説が存在したことを実証的に論じたものである。従来の研究の盲点を突いていることから、学会では極めて好評であった。本発表は論文の形にまとめ直し、現在、全国規模の査読付き学術雑誌に投稿中である。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・学術誌『国語国文』 国語国文学の分野では『国語と国文学』（東京大学国語国文学会編集、筑摩書房刊）と並ぶ査読付き月刊学術雑誌。『国語と国文学』に比し、さらに実証性の高い論文が掲載される傾向にある。 ・仏教文学会 時代の枠を越えて仏教文学に関するテーマについて発表、議論を行う全国規模の学会。大会は年1回開催。 参加者数は150名程度。発表者数は6名前後。
経済学研究科	王 子言	おう しげん	<p>右記の学術雑誌に投稿された学術論文が、優れた内容であると評価を受け「2023年度学会論文賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「日本のヤングケアラーのケア役割とケアに対する肯定的・否定的反応の関係—国際指標PANOC-YC20を用いた実証分析」 ・ 内容：本研究は、日本のヤングケアラーを対象に、国際指標として活用されているPANOC-YC20を用いて、家族のケア役割とヤングケアラーの主観的認知（ケアに対する肯定的反応及び否定的反応）の関係を明らかにし、その結果をヨーロッパ諸国の先行研究と比較することを目的とした内容である。 ・ 評価を受けた理由：本研究は、今日の日本で政策的・社会的に最も重要な課題の1つであるにもかかわらず、データや研究の蓄積が限られている「ヤングケアラー」というテーマに対する意欲的な取り組みである。さらに、本研究では、国際的に認知された指標を用いた定量的検証の結果、ヤングケアラーに対する対策に資する様々な有益な示唆を得ている。 	医療経済学会雑誌「医療経済研究」（2024年9月7日）	<p>学会論文賞についてのご紹介（医療経済学会のホームページより）</p> <p>https://d2ecsydrijdq7.cloudfront.net/wp-content/uploads/2023/11/2023-gakkai-award.pdf</p> <p>https://d2ecsydrijdq7.cloudfront.net/wp-content/uploads/2024/10/2023gakkaironnunnsyou.pdf</p>
経営学研究科	荒巻 勝	あらまぎ まさる	<p>海外の学術誌 The TQM journal に2024年12月に論文が採択され、Emerald社のジャーナルウェブサイトにも論文が掲載された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 題目「Service quality cost management in Japanese call centers: study using preventive-appraisal-failure model」 ・ 著者「Masaru Aramaki」 		<p>TheTQM Journalは品質管理研究のフィールド・トップジャーナルの一つであり、単著での掲載は稀である。</p> <p>同誌はWeb of ScienceのEmerging Source Citation Index掲載誌であり、SJRのジャーナルランキングではQ1に位置づけられている。</p>

情報学研究科	谷口 弘通	たにぐち ひろみち	<p>右記の学会において行った登壇発表およびデモ発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀プレゼンテーション賞」と「優秀デモンストレーション賞」をそれぞれ受賞した。</p> <p>【優秀プレゼンテーション賞】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「視聴覚情報を利用したテスト採点効率のリアルタイム通知による採点促進システム」 ・ 内容：長時間にわたるペーパーテスト採点の作業効率を向上させるために、加速度センサ搭載ペンにより採点者の作業効率を検出し、映像と音声による状況に合わせた適切な情報提示を行う支援システムを発表した。 ・ 評価を受けた点：プレゼンテーションの良さ、疲労状態等による作業効率低下時の改善度合いの有効性 など <p>【優秀デモンストレーション賞】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「直近の作業進捗を通知するテスト採点促進システムの実装」 ・ 内容：上記のシステムを実装し、聴講者が体験することで有効性を実感可能なデモンストレーションを発表した。 ・ 評価を受けた点：デモンストレーションの良さ、システムの有効性を実感できる点 など <p>https://www.dpsws.org/2024/?Award</p>	<p>第32回 マルチメディア通信と分散処理ワークショップ (DPSWS 2024) 2024年10月30日-11月1日</p>	<p>【大会概要】 年に1回マルチメディア通信・分散処理分野の研究発表・議論を行う全国規模の研究発表会です。 https://www.dpsws.org/2024/?Award</p> <p>【規模】 参加者数：約100人 発表数：一般発表19件、デモ・ポスター発表22件 受賞者数：プレゼンテーション賞6名、デモンストレーション賞3名</p>
理学研究科	永本 泰斗	ながもと たいと	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「ポスター賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「深共晶溶媒中ワンポトリパーゼ触媒アルドール反応 (One-pot lipase-catalyzed aldol reaction in deep eutectic solvents)」 ・ 内容 深共晶溶媒中で発生させたアルデヒドを活用した新規リパーゼ触媒アルドール反応を見出した。 ・ 評価を受けた点 結果の新規性とプレゼンテーション力 	<p>第24回生体触媒化学シンポジウム</p>	<p>【大会概要】 会期 2024年10月31日、11月1日 年に1回、産官学を問わず、生体触媒化学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 https://4hmpq7ht26.wixsite.com/sbcj-24thgifu</p> <p>【規模】 参加者数：79人 発表数：36件（ポスター発表22件含む） 受賞者数：4名</p>
理学研究科	横山 愛夢	よこやま あみる	<p>化学分野では著名な学術誌である英国 Royal Society of Chmeistry (王立化学会)のChemical Communicationsに論文が掲載された。本論文の筆頭著者は学生本人で、残り2名の著者は本研究科の教員であり、当該学生の貢献度は非常に大きい。</p> <p>内容：新しい混合金属三核錯体の合成を試み、生成した三核錯体が速やかに空気酸化され、金属間結合生成をともなう二量化によって六核錯体となることを示した。また、六核錯体は還元により三核錯体に戻ることを明らかにした。反応活性な三核錯体は小分子の活性化などに利用できると期待される。</p>		<p>【掲載誌】 Chemical Communications (Scopus 最大パーセンタイル87%), 2025年2月1日受理</p> <p>【論文情報】 タイトル：Aerobic oxidation-induced virtual radical coupling of mixed-metal PtRh2 trinuclear complexes accompanied by the formation of a Rh-Rh bond 著者：Amiru Yokoyama, Hiroshi Nakajima, Takanori Nishioka DOI：10.1039/D5CC00112A</p>
理学研究科	吉川 真太郎	よしかわ しんたろう	<p>右記の学会における口頭発表が、優れた内容であると評価を受け「学生優秀発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「ドナー・アクセプター系光触媒及び生体/金属微粒子触媒を含む複合系を用いたギ酸分解による水素製造」 ・ ドナー・アクセプター系光触媒、ギ酸脱水素酵素及び白金微粒子からなる複合触媒系を構築し、この系を用いた光照射によるギ酸分解に基づく水素製造に関して口頭発表した。発表内容について座長及び審査員による質疑応答に基づき、優れてた研究と判断され、対象口頭発表24件のうち3件が学生優秀発表賞として受賞した。 	<p>第44回水素エネルギー協会 (HESS) 大会 (2024/12/5-6)</p>	<p>【大会概要】 水素エネルギー協会は、第一次オイルショック前の1973年7月に設立され、我国に於いて進行中の水素エネルギー技術分野における研究成果について水素エネルギー協会大会を原則として年に1回開催し、今回は44回大会である。</p> <p>【規模】 参加者数：150人 発表数：口頭発表35件、ポスター発表28件 受賞者数：3名（学生優秀発表賞審査対象24名）</p>

理学研究科	吉野 優季花	よしの ゆきか	<p>上記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「ベストプレゼンテーション賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「イガイの足糸形成を阻害する三環性ジテルペノイド類の不斉全合成研究」 ・ 内容 船底や網等に付着するイガイの接着を阻害する海藻成分イソリネアロールを低原子価チタンを用いた鍵反応により不斉合成する方法を開発した。また合成したいくつかの化合物の阻害活性を評価し、より高活性な化合物を見出すことに成功した。 ・ 評価を受けた点 など 発表が明快であり、内容が充実していた点と、的確な質疑応答が高く評価された。 	第68回香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会 (2024/10/26~28)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、精油化学、テルペン化学、香料・テルペンに関わる生物・生体関連化学、香料科学等の分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：約500人 発表数：95件（口頭発表のみ） 受賞者数：8名（40歳未満の講演者が対象）</p>
理学研究科	山田 恭佑	やまだ きょうすけ	<p>上記の学会におけるポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「Sutudent Poster Session Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Synthesis of Nylon Resin Precursor Materials from Biomass-Derived Pyruvate with Photo/Biocatalyst Using Visible Light As an Energy Source」 ・ 光触媒と生体触媒を用い、バイオマス由来化合物であるビルビン酸を原料に、可視光をエネルギー源として、生分解性ナイロン原料であるL-アラニン合成系の構築に関してポスター発表した。発表内容についてアメリカ・韓国・日本の電気化学会に所属する専門家による質疑応答に基づき、優れた研究と判断され、対象ポスター378件のうち10件がSutudent Poster Session Awardとして受賞した。 	PRiME 2024/ (2024/10/6-11)	<p>【大会概要】 PRiMEはアメリカ電気化学会（The Electrochemical society, ECS）、電気化学会（ECSJ）、韓国電気化学会（KECS）合同の国際会議で、4年に一度アメリカ合衆国ハワイで開催される。世界60ヵ国から6,000人ほどが参加者する大規模な国際会議である。</p> <p>【規模】 参加者数：6,000人 発表数：口頭発表約5,000件、ポスター発表約500件 受賞者数：10名（学生ポスター賞審査対象378名）</p>
理学研究科	玉置 喜大	たまぎ よしひろ	<p>上記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「大会会長賞」（ベストプレゼンテーション賞）を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「完全ヒト型変異を持つホルムアルデヒド代謝酵素不全マウスの確立とそのフェノタイプ」 ・ 内容 ヒトのアルデヒド代謝に関連する酵素の不活性型多型配列をノックインしたマウスの発育や行動を解析した。 ・ 研究内容と発表技術がともに評価され学会評議員と大会長による選考で選ばれた。 	日本環境変異原ゲノム学会第53回大会 (2024/12/7-8、岡山市)	<p>【大会概要】 年に1回、遺伝毒性分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：400人 発表数：約120件（ポスター発表含む） 受賞者数：4名、うち大会会長賞1名</p>
理学研究科	貫上 晃宏	かんじょう あきひろ	<p>①物理学の分野で国際的に最も権威のある米国物理学会の学術誌（APS）へ論文が掲載された。 ②FINESS2024で共著者がポスター発表を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Universal description of massive vortices in superfluids」 <p>③日本流体力学会年会2024で口頭発表を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「超流動体における渦質量をもつ点渦系の運動」 	②FINESS2024: Finite temperature Non-Equilibrium Superfluid Systems (2024/9/1~5) ③日本流体力学会 年会2024 (2024/9/25~27)	<p>① Akihiro Kanjo, Hiromitsu Takeuchi, "Universal description of massive point vortices and verification methods of vortex inertia in superfluids", Physical Review A 110, 063311 (2024) ② 【大会概要】 数年に1回開催される有限温度非平衡の超流動に関する国際会議 【規模】 参加者：50人程度、発表数：約50件 ③ 【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、流体力学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者：約500人、発表数：約300件</p>

理学研究科	清水 佑馬	しみず ゆうま	<p>清水佑馬さんは、卒業研究、ならびに博士前期課程の1年生までに行った研究を筆頭著者として論文にまとめ、国際学術雑誌であるBiorheology誌に投稿し、2024年10月1日に受理されました。Biorheology誌は、バイオレオロジー(生体および生体を構成する物質の流動と変形の科学)を扱う専門誌として、1962年に創刊された大変由緒正しい雑誌です。植物の茎では、表皮組織と内部組織が細胞壁を介して接着しており、両組織の接着の度合いが茎の成長に関与しているだろうと漠然と考えられてきましたが、それを検証した研究はありませんでした。清水さんは、両組織の接着力を定量的に測定する方法を確立し、両組織の接着の度合いが小さいほど、茎の成長能力が高いことを示しました。博士前期課程に在学中の学生が筆頭著者として論文を発表することはまれであり、清水さんが大変優秀であることを示しています。以上のことから、清水佑馬さんを学長表彰候補者として推薦いたします。</p>		<p>著者: Shimizu Y, Wakabayashi K, Miyamoto K and Soga K タイトル: Measurement of adhesive strength between the epidermal and inner tissues of plant stems using a tensile tester. 掲載雑誌: Biorheology (2024年10月1日受理、印刷中)</p>
理学研究科	吉良 凌一	きら りょういち	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生賞」を受賞した。 ・ 標題「ウロキナーゼ型プラスミノゲンアクチベータ受容体の特異的に認識するhelix-loop-helixペプチドの創出」 ・ 内容：癌の進展で発現が上昇するウロキナーゼ型プラスミノゲンアクチベータ受容体 (uPAR) 結合性HLHペプチド (ヘリックス-ループ-ヘリックス) の新規創出と癌細胞内への移行評価。 ・ 評価を受けた点：独自性の高いHLHペプチドを用いて、uPARへの特異性の高いペプチドの創出に世界で初めて成功し、今後の抗がん剤を含む薬物送達に応用性・波及効果が高いことを立証した。</p>	日本膜学会 膜シンポジウム2024 (2024年11月28-29日)	<p>【大会概要】 膜分野 (生体膜・人工膜・境界領域)に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会 (年に1回、産官学を問わず)。膜シンポジウム 2024 の主題は“融合による創膜”であり、日本膜学会の特徴である異分野(人工膜・生体膜・境界領域)からの様々な研究者が垣根を越えて深く議論することで 各々の視点や技術が融合し、新たな“創膜”へと結びつくことを目的としている。 【規模】 参加者数：200人 発表数：119件 (内、ポスター発表81件) 受賞者数：14名 (学生賞)</p>
理学研究科	名古 竜二郎	なごりゅうじろう	<ul style="list-style-type: none"> 学振DC1に内定している(採択率15%ほど) M2にして学術論文をすでに2本掲載している。今まで指導した大学院生の中でトップの実績である。2本とも素粒子物理学分野では国際的に権威のある学術誌である。特に、2本目の論文は名古くん独自で研究を進めた成果である。 右記学会にて講演を行なった。 右記夏の学校(参加大学院生300人規模)の口頭発表部門で優秀発表賞受賞(素粒子パート3名受賞のうち1人) 大学院入試では90%の正答率にてトップ合格した。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本学術振興会特別研究員(DC1)内定 日本物理学会第79回年次大会(2024/9/16-19 北海道大学)にて講演発表 第70回原子核三者夏の学校(2024/8/21-25) 優秀発表賞(プレスリリース掲載済) 	<p>【学術論文】</p> <ul style="list-style-type: none"> Attempt at Constructing a Model of Grand Gauge-Higgs Unification with Family Unification, N. Maru and R. Nago, Phys. Rev. D109 (2024) 115005(研究業績についてプレスリリース掲載済) New models of SU(6) grand gauge-Higgs unification, N. Maru and R. Nago, JHEP11 (2024) 035 <p>【研究会講演】</p> <ul style="list-style-type: none"> 信州大学からセミナー招待講演(オンライン)を依頼された 新ヒッグス勉強会
理学研究科	Tran Tung Lam	とらん とうん らむ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Oral Presentation Award」を受賞した。 ・ 標題「Investigation of Machine Learning Models for Slope Failure Susceptibility Zonation in parts of Yen Bai Province, Vietnam」 機械学習を用いたベトナムにおける斜面崩壊危険度マップの作成が評価された。</p>	GIS-IDEAS 2024 (2024/12/11 - 12/13)	<p>【大会概要】 2年に1回、産官学を問わず、空間情報学分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際学会です。 【規模】 参加者数：130人 発表数：50件 受賞者数：4名</p>

理学研究科	佐藤 龍	さとう りゅう	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Poster賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Spectral optimization of jumping spider Rh1 for depth perception from image defocus」 ・ 内容：光受容タンパク質の波長感受性が、ピンぼけ像を用いた奥行き知覚のために、予想外の厳密さで最適化されていることを明らかにした研究 ・ 評価を受けた点：テーマのオリジナリティ、アプローチの多面性、データの質の高さおよび発見の意外性が高く評価された。 	20th International Conference on Retinal Proteins (第20回レチナルタンパク質国際会議) /2024/11/20	<p>【大会概要】 2年に1回、レチナルタンパク質研究分野の第一線で活躍する研究者が一同に会する、同分野で最も権威のある国際会議。</p> <p>【規模】 参加者数：約200人 ポスター発表件数：91件 受賞者数：6名</p>
理学研究科	Ibrahim Mohammed Danlami	いぶらひむ むはんまど だんらみ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Oral Presentation Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Hydrogeophysical Analysis of Vertical Electrical Soundings for Groundwater Potential and Aquifer Vulnerability Evaluation in the Federal Capital Territory, Abuja, Nigeria」 <p>ナイジェリア アブジャ地域での地下水ポテンシャルと帯水層脆弱性評価における水理地質学的解析が評価された。</p>	FOSS4G ASIA 2024 (2024/12/15 - 12/18)	<p>【大会概要】 2年に1回、産官学を問わず、空間情報学分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：250人 発表数：70件 受賞者数：2名（口頭発表）</p>
理学研究科	植田 允教	うえだ みつりの	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Poster Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Identification of Morphological Features in Slope Failure Areas due to Heavy Rainfall using Change Vector Analysis and Random Forest Classifier」 <p>本発表で機械学習を用いた斜面崩壊の新たな抽出方法を開発したことが評価された。</p>	GIS-IDEAS 2024 (2024/12/11 - 12/13)	<p>【大会概要】 2年に1回、産官学を問わず、空間情報学分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：130人 発表数：50件 受賞者数：4名</p>
工学研究科	大崎 歩乃花	おおさき ほのか	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀講演賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「低レイノルズ数流れにおいて平板に付けた突起の効果」 ・ 内容：近年需要が増しているドローンが飛行する低レイノルズ数域では、流れ場に適した新たな翼型が必要とされていることから、ロータを模した平板に半円状の突起を設置し、数値流体計算により空力特性への影響を解析した。その結果、突起により形成される剥離渦によって平板の空力特性が向上し、迎角に応じて適切な設置位置と設置数が異なることを明らかにした。 ・ 評価を受けた点：講演論文と当日の発表内容日及び質疑応答が優れていた。 	第56回流体力学講演会／第42回航空宇宙数値シミュレーション技術シンポジウム (2024/7/4) ※受賞日：2024/11/6	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、航空宇宙工学分野の流体力学／数値シミュレーションに関する研究成果の発表、議論を行う日本航空宇宙学会主催の全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：233人 発表数：141件 受賞者数：7名 https://branch.jsass.or.jp/aerocom/ryu/ryu56/award/</p>
工学研究科	本郷 拓大	ほんごう たくと	<p>航空宇宙工学分野に関する国内学術誌である日本航空宇宙学会論文集に掲載された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「小型ジェットエンジンを用いたココナッツ油を原料とした脂肪酸エチルエステルの燃焼特性および排ガス成分の検証」 ・ 内容：従来手法よりも製造コストを削減できる共溶媒法を用いてココナッツ油由来のバイオジェット燃料を製造し、この燃料の燃焼特性および排ガス成分について小型ジェットエンジンを用いて、従来のジェット燃料と比較検証した。 ・ 評価を受けた点：航空用代替燃料の製法（製造工程）で課題となっていた製造時のエネルギー消費を解決できる新たな製造手法で生成された燃料を模擬航空代替燃料と見立て、基準となるジェット燃料との燃焼特性を把握したことが高く評価された。 	日本航空宇宙学会論文集 73 (2025), pp. 1-9 (2025/02/05)	<p>タイトル：小型ジェットエンジンを用いたココナッツ油を原料とした脂肪酸エチルエステルの燃焼特性および排ガス成分の検証 著者：本郷拓大, 小川泰一郎, 森浩一, 前田泰昭, グエン フィン プオン ウィエン 学術誌：日本航空宇宙学会論文集, 73 (2025), pp. 1-9</p> <p>日本航空宇宙学会論文集は、以下の評価基準で評価されている。 航空宇宙工学あるいはそれに関連した分野の研究の成果であり、研究成果に独自の新しさがあり、ある水準に達していること、研究成果に一応の区切りとまとまりがあること。</p>

工学研究科	林 秀汰	はやし しゅうた	<p>業績1: 日本混相流学会混相流シンポジウム2024においてポスター発表を行い、「日本混相流学会ベストプレゼンテーションアワード」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題 「斜め平板下における上昇気泡群の構造に及ぼす気泡発生頻度と上昇距離の影響」 ・ 内容 様々な頻度で発生させた気泡群が斜め平板を沿って上昇する過程を撮影し、撮影画像から二気泡の相対座標を算出することで、気泡クラスタの構造を定量化した。また、気泡クラスタの構造の類似性を相関係数によって評価した。 ・ 評価を受けた点 など これまで不明であった気泡クラスタの構造に及ぼす気泡発生頻度の影響を明らかにし、気泡発生頻度を増加させることにより気泡クラスタの発達が早期化されることを、相関係数を用いて示した点が評価された。 <p>-----</p> <p>業績2: 申請者が第一著者の以下の論文が掲載可となった(2025年3月号に掲載予定)。本論文で得られた実験結果は、気泡流の構造を把握する上で有用な知見を与えるものである。</p> <p>論文名: 斜め平板下における上昇気泡群の構造に及ぼす気泡発生頻度と上昇距離の影響</p> <p>著者: 林 秀汰, 松崎 健太郎, 小笠原 紀行, 高比良 裕之</p> <p>雑誌名: 「混相流」(日本混相流学会論文集)</p>	<p>業績1: 日本混相流学会混相流シンポジウム2024/ (2024/9/4~2024/9/6)</p> <p>-----</p> <p>業績2: 「混相流」(日本混相流学会論文集) https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjmf/-char/ja</p>	<p>業績1: 【大会概要】 年に一度開かれる「日本混相流学会」の全国規模のシンポジウム</p> <p>【規模】 参加者数: 305名 発表数: 201件(うちポスター発表: 95件)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ エヴィデンス: 賞状の写し <p>----</p> <p>業績2: 林秀汰, 松崎健太郎, 小笠原紀行, 高比良裕之, 斜め平板下における上昇気泡群の構造に及ぼす気泡発生頻度と上昇距離の影響, 混相流, 2025, 全9ページ(掲載決定)。</p> <p>概要: 斜め平板下を上昇する少数の球形気泡群を対象とし、気泡の発生頻度と上昇距離が気泡クラスタの構造に与える影響や、各条件間における相関に関する調査を行い、気泡の発生頻度が同程度の場合には、気泡の上昇距離が長くなるにつれて横並びの配置をとる気泡組の割合が増加し、気泡クラスタの発達が促進される等の知見を得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ エヴィデンス: 採択(掲載可)のメール, 論文原稿
工学研究科	盛屋 匠	もりや たくみ	<p>下記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「建築計画委員会 若手優秀発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「南海トラフ地震による津波浸水想定区域における廃校活用の可能性に関する研究一和歌山県日高町立旧比井小学校を対象として一」 ・ 南海トラフ地震による津波浸水想定区域での廃校活用が地域内外とつながる拠点となる可能性を有していることを明らかにした。 ・ 評価を受けた点: 専門分野の基礎知識を十分に把握しており、研究テーマが独創性、学術的意義を有している。 	2024年度日本建築学会大会(関東)学術講演会/(2024/8/28)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、建築学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数: 10536人 発表数: 5979人(うち建築計画部門590人) 受賞者数: 33名</p>
工学研究科	王 佳怡	おう かい	<p>下記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「都市計画委員会 若手優秀発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「大都市中心部における歴史的資源としての町家の現状と活用方法に関する研究 -堺環濠都市北部地区を対象として(その2)-」 ・ 堺環濠都市北部地区の歴史的市街地における保全活動の実態把握、解体要因、継承方法を明らかにし、都市の発展と共存する歴史的資源の保全手法を探す。 ・ 評価を受けた点: 研究成果を活かした今後の発展性が期待され、都市計画・文化財保護分野においてさらなる貢献が見込まれる。 	2024年度日本建築学会大会(関東)学術講演会/(2024/8/30)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、建築分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数: 10536人 発表数: 5979人(うち都市計画部門534人) 受賞者数: 41名</p>
工学研究科	木川 廉	きがわ れん	<p>下記の学会において、その発表が優れていることから「年次学術講演会優秀講演賞」を受賞した。</p> <p>題目「母材片側に突起を有する摩擦接合継手の突起および突起形状がすべり挙動に与える影響」</p> <p>内容: 本研究では接合面に無機ジンクリッチペイントを塗布した際の、母材片側に突起を有する摩擦接合継手のすべり挙動を解明すべく、突起の有無および突起形状をパラメータとしたFEM解析を実施した。FEM解析の結果、突起により載荷時の軸力低下率が5%増加することと、突起側接合面のすべりが平面側の接合面よりも先行して発生することの、2つの要因により突起を有するケースは、突起を有さないケースよりもすべり係数が16%低下することが明らかとなった。また、突起頂点部の幅が大きくなることで、すべり係数が低下する2つの要因が与える影響が低減される傾向を示したものの、継手の強度に与える影響はわずかであり、すべり係数の変動も1%以下と同程度であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 評価を受けた点 同セッションの講演者の中で、論文内容に加え、講演が簡潔明瞭で最も優れたものとして評価された。 	令和6年度土木学会全国大会第79回年次学術講演会/(2024/9/2~9/6)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、土木分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。被推薦者は第1部門で発表している。</p> <p>【規模】 参加者数: 8000人程度 第1部門: 発表数: 420件(上記部門のみ) 受賞者数: 30名(上記同部門のみ)</p>

工学研究科	西村 恵	にしむら けい	<p>①右記の学会において行った発表が優れた研究発表と評価を受け、「学生優秀発表賞」を受賞した。 [発表論文のタイトル] 圧電振動子と物理リザーバー計算による電流センシング [内容] 圧電振動子を用いた電流センサの非線形性を利用し、物理リザーバーコンピューティングと統合することで、電流センサに機械学習機能を付与した。ベンチマークテストを実施し計算性能の評価を行った。さらに、平行電線を通る電流値を学習し、未知の電流値の予測に成功した。</p> <p>②全国規模の学術誌に論文が掲載された [論文のタイトル] Neuromorphic alternating current sensing using piezoelectric resonators and physical reservoir computing DOI:10.35848/1347-4065/ad73e1 [内容] 圧電振動子型電流センサを用いた物理リザーバーコンピューティングモデルの原理やアルゴリズム、計算性能の評価方法などについての詳細をまとめた。さらに、平行電線の電流予測について記載した。</p>	<p>① 第41回強誘電体会議 (FMA41) (2024/6/12-15) 発表日: 2024/6/15</p> <p>② Japanese Journal of Applied Physics, 63, 09SP23 Published : 20 September 2024</p>	<p>① [会議の概要] 強誘電体会議は、昭和52年以来、強誘電体とその応用に関する総合的討議を行う場として好評を得てきた会議である。科学技術の急速な進歩に伴い、平成22年よりこの会議で討議されるトピックスは強誘電体のみならず、分極に関わる全ての現象・理論・応用まで広がっている。 [規模] 会議は全国各地の大学から多数の参加があり、数日間に渡ってほぼ毎年行われている。 参加者数: 198人 発表数: 72件 受賞者数: 4人</p> <p>② [学術誌の概要] Japanese Journal of Applied Physics 1962年7月に日本で創刊された日本の学術誌で、査読された論文のみ掲載される。日本から発信される英文での応用物理学分野における総合学術誌である。</p>
工学研究科	請関 優	うげき ゆう	<p>右記の学会において行った発表が、優れた研究発表をなされた、あるいは討論等によりこの会議を盛り上げた若手研究者を対象とした「EMS賞」を受賞した。 [発表論文のタイトル] Electrical characterization of ferroelectric gate FETs for physical reservoir computing [内容] 強誘電体ゲート電界効果トランジスタ (FeFET)を用いた物理リザーバーコンピューティングにおいて、MOSFETとHf0.5Zr0.5O2強誘電体キャパシタを用いて金属-強誘電体-金属-絶縁体-半導体構造のFeFETを構成し、ベンチマークタスクにより強誘電体薄膜の分極挙動と演算性能との関係を調べた。</p>	<p>第43回電子材料シンポジウム(EMS43) (2024/10/2-4) 発表日: 2024/10/4</p>	<p>[概要] このシンポジウムは、1982年に京都大学の佐々木昭夫教授を代表者とする文部省科学研究費補助金特定領域研究「混晶エレクトロニクス」の研究会として発足。特定領域研究終了後の1990年からは、一般に開かれた主に混晶半導体を対象とする「混晶エレクトロニクスシンポジウム (ASPECS)」として、さらに1995年からは、対象分野をさらに広げ「電子材料シンポジウム (EMS)」として、討論を中心とするユニークな研究会として多くの方々から支持をえている。 [規模] 口頭発表数137名のうち受賞者数 5名</p>
工学研究科	浪瀬 敦夫	なみせ あつお	<p>右記の研究会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生ポスター賞 最優秀賞」を受賞した。 ・ 標題 「ソリトン制御によるPSAを増幅器として用いたDQPSK信号の位相安定化」 ・ 内容 ソリトン制御を組み込んだソリトン伝送システムの損失補償増幅器としてPSAを用い、ソリトン多値伝送の長距離の可能性を提案した ・ 評価を受けた点 研究内容およびプレゼンテーション技術が高く評価された</p>	<p>電子情報通信学会 光ファイバ応用技術研究会 / 2025年1月23日、24日)</p>	<p>【研究会概要】1998年に設立され、通信・計測・デバイス・材料等さまざまな視点から、幅広く光ファイバを応用する技術に関する研究成果を発表する研究会で、年間6回開催されている電子情報通信学会の全国規模の研究会です。 【規模】 年間発表件数 101件 (2024年度第5回まで) 本ポスター賞対象の発表件数 15件 受賞件数: 4件 (うち最優秀賞1件) https://www.ieice.org/cs/oft/jpn/awards/</p>
工学研究科	西井 翔馬	にしい しょうま	<p>右記の学会において行った発表が、優秀な発表であると評価を受け「YOC奨励賞」を受賞した。</p>	<p>令和6年電気学会電力・エネルギー部門大会 (2024/9/4 ~ 2024/9/6)</p>	<p>【大会概要】 年に1回、電力・エネルギー分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数: 1,000人前後 発表数: 390件 (ポスター発表含む) 受賞者数: 51名、うちYOC奨励賞19名</p>
工学研究科	福居 諒	ふくい りょう	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Paper Award」を受賞した。 ・ 標題 「Optimal Operation and Social Welfare for an Omnichannel Green Closed-Loop Supply Chain with Carbon Emissions and Warrantee Periods under Government Intervention」 ・ 内容 SDG's 達成に向けた低炭素・再資源化促進のため、政府介入下でオムニチャネルをもつ低炭素・再資源化・製品の保証期間を考慮した生産物流環境をもつサプライチェーンの構築、最適運用と社会評価を数理解析で明らかにした。</p>	<p>第24回経営工学とマネジメントシステムに関するアジア・太平洋会議 (APIEMS 2024) (2024/11/12)</p>	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、アジア・欧米諸国から経営工学分野の研究成果の発表、議論を行う国際会議です。 【規模】 参加者数: 350人 発表数: Logistics and Supply Chain Management 部門 36件 受賞者数: Best Paper Awards 受賞者 5名</p>

工学研究科	竹内 洸稀	たけうち こうき	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「電力技術委員会 奨励賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表題「深層強化学習を用いた最適潮流計算に関する検討」 	電力技術・電力系統技術合同研究会/ (2024/9/19~20)	<p>【大会概要】 「電力技術・電力系統技術一般」, 「分散電源・次世代グリッド・レジリエンス」をテーマに研究内容の成果を発表する 電気学会の研究会であり、全国規模で本大会の合同研究会は年1回の開催である</p> <p>【規模】 発表数：約80件 受賞者数：少数</p>
工学研究科	山下 美里	やました みさと	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「プラスチック成型加工学会 第32回秋季大会 ポスター賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・標題「界面光環化付加重合の可逆性を利用した分解性高分子微粒子の合成」 ・内容：海洋マイクロプラスチック問題が世界的な環境課題として認識されている中、本研究では、可逆的な光反応を重合素反応として用いた新たな重合により、光と水で分解できる高分子カプセルを合成することに成功した。 ・評価を受けた点：優れたポスター発表を行ったことが評価された。 	プラスチック成型加工学会 第32回秋季大会/ (2024/11/27-28)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、高分子化学の分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：約500人 発表数：約200件（ポスター発表含む） 受賞者数：8名</p>
工学研究科	薄川 翔太	うすかわ しょうた	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「The Best Poster Presentation Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・標題「Investigating the Melting Behavior of Polymer Crystals with Extended Chains Prepared by Topochemical Polymerization」 ・内容 トポケミカル重合により伸長鎖を持つ高分子結晶を作製し、その融解挙動を計測した。また、古典的理論と比較し、古典論から予想される値と実測値が大きく異なることを実証した。 ・評価を受けた点 モノマー合成、結晶化、トポケミカル重合およびその物性測定を全て自分でを行い、新たな結果を得たことが評価された。 	The 10th TKU-ECUST-KIST-OMU-UH-IHU-KMITL-UTAR-TNU-HUIT Joint Symposium on Advanced Materials and Applications (USAMA-10) (2024/10/30-11/1)	<p>【大会概要】 10の協定を結んだ大学の参加する国際会議で、2024年度は中国の華東理工大学で開催されました。</p> <p>【規模】 参加者数：50人 発表数：30件（ポスター発表含む） 受賞者数：10名</p>
工学研究科	橋井 貴士	はしい たかし	<p>右記の学会において行った口頭発表が、優れた内容であると評価を受け「『エネルギー変換・貯蔵・輸送セラミックス材料の基礎と応用』セッション 最優秀プレゼンテーション賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表題目「水を反応媒に用いたLi10GeP2S12電解質の作製」 ・内容：水のみを反応媒に使用してLi10GeP2S12電解質の液相合成を行い、また、そのイオン伝導度と全固体電池用電解質としての性能を評価した。 	日本セラミックス協会 第37回秋季シンポジウム/ (2024/9/10-12)	<p>【大会概要】 年に1回、秋に開催されるセラミックス関連分野における国内最大規模の研究討論会です。本シンポジウムでは、先端的で注目度の高い研究分野における発表を「特定セッション」として特集しており、先端研究者の交流が情報交換の場としても広く活用されています。</p> <p>【規模】 参加者数：約1,000人(口頭発表 709人(25セッション)、ポスター発表 199人) 発表数：対象の口頭発表セッション 48件 受賞者数：1名</p>
工学研究科	和田 佳成太	わだ かなた	<p>右記の学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・標題「6つのCH3S基が置換した「一電子σ結合」性ラジカルカチオンの特異な電子状態」 ・内容：かご型化合物のラジカルカチオンについて、Marcus理論を用いて標題に示したラジカルカチオンと、類似の分子構造をもつラジカルカチオンの寿命の違いを電子構造の観点から調査した。 ・評価を受けた点：レーザーフラッシュフォトリソスやサイクリックボルタンメトリー、量子化学計算から得られた結果をMarcus理論を用いてまとめ、「一電子σ結合」性ラジカルカチオンの安定性を評価した点。 	日本化学会秋季事業 第14回 CSJ 化学フェスタ 2024 / (2024/10/22-24)	<p>【大会概要】 産官学を問わず、化学に関する広い分野での研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会。</p> <p>【規模】 参加者数：約2700人 発表数(学生ポスター発表)：1086件 優秀ポスター賞受賞者数：199名</p>
工学研究科	山本 幸永	やまもと ゆきのり	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「粒子流体プロセス部会 シンポジウム賞(プレゼンテーション賞)」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・標題「生分解性キャリア粒子を用いたナノ農業の合成と防除効果」 	化学工学会第55回秋季大会 (2024/9/13)	<p>【大会概要】 年に2回、産官学を問わず、化学工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：2,000人 受賞対象となる発表数：71件（ポスター発表含む） 受賞者数：14名</p>

工学研究科	服部 冠志	はっとり かんじ	下記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「特別賞」を受賞した。 ・ 標題「音響キャビテーションの気泡形状安定性に及ぼす高調波の影響に対する線形安定性解析」	2024年度第33回ソノケミストリー討論会 (2024/10/19)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、超音波化学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：200人 発表数：28件（ポスター発表含む） 受賞者数：6名、うち特別賞3名 など
工学研究科	高橋 美郁	たかはし みいく	以下の著名な国際学術誌へ第一著者として論文が掲載された。 Co-utilization of microalgae and heterotrophic microorganisms improves wastewater treatment efficiency. M. Takahashi, Y. Karitani, R. Yamada*, T. Matsumoto, H. Ogino, Applied Microbiology and Biotechnology, 108, 468 (2024) https://doi.org/10.1007/s00253-024-13309-w 掲載日：2024/9/18	Published online: 18 September 2024	Applied Microbiology and Biotechnology CiteScore 10.0, 最大パーセンタイル 87%（工学研究科選定OA誌） Impact Factor 3.9
工学研究科	齋藤 大	さいとう おおき	下記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「特定セッション若手奨励賞」を受賞した。標題「原子間力顕微鏡を用いた水酸化銅上での銅バドルホイール型金属有機構造体のヘテロエピタキシャル成長過程観察」	第37回 日本セラミックス協会秋季シンポジウム/ (2024/9/10)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、セラミックス分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 昨年度 参加者数：1491人 発表数：786件
工学研究科	野村 佳澄	のむら かすみ	下記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター賞」を受賞した。表題「天然由来DNAと金属イオンの相互作用により形成されたハイドロゲルの機械特性」	第73回 高分子討論会/ (2024/9/26)	【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、高分子分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：2,500人 発表数：1,500件（ポスター発表含む）
工学研究科	秋山 太一	あきやま たいち	該当学生を筆頭著者としてElsevierのMolecular Catalysis誌に学術英語論文を発表した(2025年1月25日 accepted、2025年1月31日オンライン掲載、in press)。		Title: Direct Synthesis of Diphenyl Carbonate from CO2 and Phenol with CeO2 and 2-Cyanopyridine Molecular Catalysis, 574 (2025) 114886 Taichi Akiyama, Yusuke Kita, Pengru Chen, Masazumi Tamura DOI: 10.1016/j.mcat.2025.114886 雑誌のImpact factor: 3.9
工学研究科	竹内 優斗	たけうち ゆうと	下記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生優秀講演賞」を受賞した。 ・ 標題「マルチアンテナGPSによるマルチコプター姿勢推定と信頼性向上に関する研究」 ・ 内容：マルチコプター等の移動体で課題となっている方位角推定をGPSマルチアンテナにより改善するアルゴリズムを考案し、実験・解析について報告した。 ・ 先行研究からの改善点（ハードウェア、アルゴリズム等）の有効性が評価された。	令和6年度、日本航空宇宙学会主催、第62回飛行機シンポジウム/ (2024/10/15-17)	【大会概要】 航空宇宙工学分野で我が国を代表する日本航空宇宙学会主催の全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：300人 発表数：35件 受賞者数：学生優秀講演賞5名
工学研究科	八杉 尚樹	やすぎ なおき	下記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生優秀講演賞」を受賞した。 ・ 標題「マルチコプターに対するGNSSスプーフィング攻撃の実験的検証」 ・ 内容：GNSSに対するスプーフィング（なりすまし）攻撃が近年問題になっている。マルチコプターを用いたスプーフィング実験を行い、検知アルゴリズムを新規に考案し、評価結果について報告した。 ・ 新規に考案したアルゴリズムの有効性が評価された。	令和6年度、日本航空宇宙学会主催、第62回飛行機シンポジウム/ (2024/10/15-17)	【大会概要】 航空宇宙工学分野で我が国を代表する日本航空宇宙学会主催の全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：300人 発表数：35件 受賞者数：学生優秀講演賞5名

工学研究科	平山 裕也	ひらやま ゆうや	<p>流体力学に関する国際学術誌であるPhysics of Fluidsに掲載された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Axisymmetric background-oriented schlieren measurement for cylindrical combustion flow in micro-rocket torches」 ・ 内容：トーチ噴射ガスを高精度に可視化するための軸対称モデルを組み込んだ新しいBackground-Oriented Schlieren法（BOS法）を用いた計測手法を開発した。 ・ 評価を受けた点：逆アーベル変換の数学モデルを拡張し、視野と光路にばらつきがあるBOS測定ケースに対応できるようにし、実用面で大きな価値があることが高く評価された。 	Physics of Fluids 37 (2025), 026108 (2025/02/05)	<p>タイトル：Axisymmetric background-oriented schlieren measurement for cylindrical combustion flow in micro-rocket torches</p> <p>著者：Yuya Hirayama, Shinichiro Ogawa</p> <p>学術誌：Physics of Fluids, 37 (2025), 026108</p> <p>IF: 4.1</p> <p>CiteScore: 6.4</p>
工学研究科	浪川 新大	なみかわ あらた	<p>日本船舶海洋工学会のポスターセッションにて、発表したポスターが学術的に優れているとの評価を受け、「ポスター賞 優秀賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題 A Study on Fleet Avoidance Maneuvering using Multi-Agent Reinforcement Learning ・ 内容：マルチエージェント強化学習による隊列避航に関する研究 ・ 評価を受けた点：研究内容、ポスターデザイン、発表、質疑への応答の観点から受賞に値すると認められた。 	日本船舶海洋工学会 令和6年秋季講演会 ポスターセッション (2024/11/21-11/22)	<p>【大会概要】</p> <p>年に2回、船舶海洋工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会である。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：483名</p> <p>発表数:195件（ポスター発表者含む）</p> <p>ポスター発表者数:10名 うちポスター賞 受賞者3名</p>
工学研究科	小原 伽羅	おはら きやら	<p>右記の学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「若手優秀ポスター賞 最優秀賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Experimental Approach to Construction of the Simulation Model for Mixed Lifting of Manganese Nodules and REY-Rich Mud」 ・ 内容 <p>日本のEEZ内でマンガン団塊とレアアース泥が同時に存在するため、ポンプと管を用いたパルプリフト法による混合揚収が検討されている。しかし、レアアース泥は高粘度の擬塑性流体であり、さらにスクイズポンプが引き起こす脈動流を考慮したシミュレーションモデルを構築する必要があるが、構築に必要な情報が不足している。そこで本研究では、擬塑性流体を用いた揚収実験から擬塑性流体の粘度特性と脈動流が管内流へ及ぼす影響を解明し、効率的な混合揚収モデル構築のための知見を得た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 評価を受けた点 <p>海底資源開発については解決すべき技術課題が多い。その一つである混合揚収方法の脈動問題に対して、基礎的な実験によりその現象の発生メカニズムを明らかにしたこと。</p>	日本船舶海洋工学会 令和6年 秋季講演会 (2024/11/21)	<p>【講演会概要】</p> <p>年に2回、船舶海洋工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の講演会です。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：483人</p> <p>発表数：10件（1次審査後の件数）</p> <p>受賞者数：3名、うち最優秀賞1名、優秀賞2名</p>
工学研究科	天野 由視	あまの よしみ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け、2023年度の「日本機械学会フェロー賞」を受賞し、2024年10月5日の授賞式で表彰された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「溝付きテイラー・クエット流れにおける乱流熱流動のラージ・エディ・シミュレーション」 	日本機械学会熱工学コンファレンス2023, 神戸大学 (2023/10/14)	<p>【大会概要】</p> <p>年に1回、産官学を問わず、日本機械学会熱工学部門（約2200名の登録者）が行う熱工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の講演会です。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：425人</p> <p>発表数：233件</p> <p>受賞者数：5名</p>
工学研究科	芝田 凌太郎	しばた りょうたろう	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Young Scientist Poster Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Simultaneous removal of VOCs and nanoparticles using a wet-type catalytic nonthermal plasma reactor」 	The 17th International Conference on Electrostatic Precipitation (XVII ICESP) (2024/10/28-31)	<p>【大会概要】</p> <p>ESP（電気集じん）に関する産学の情報の交換の場として、1981年の第1回以来世界各地で開催され、研究成果の発表、議論を行う国際学会です。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：188人（20カ国）</p> <p>総発表数：94件（ポスター発表含む）うち若手発表29件</p> <p>受賞者数：4名</p>

工学研究科	李 星宇	り せいう	第一著者として執筆した論文が、右記の学会において毎年1回発行されている査読付き論文集に掲載された。	2024年度環境情報科学学術研究論文集38	李星宇, 高柳幸奈, 鍋島美奈子, 西岡真稔: クールスポットのWBGT低減効果による比較評価方法の検討:大阪府内の駅前広場の事例, 2024年度環境情報科学学術研究論文集38, pp.185-190, 2024 https://doi.org/10.11492/ceispapers.ceis38.0_185
工学研究科	初岡 涼平	はつおか りょうへい	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Poster Award」を受賞した。 ・ 標題「Nano Disk on Mirror構造の加熱による散乱強度増大の要因」 ・ 内容: スペーサー層を有する鏡面基板上にナノディスク構造を配列したNanoDisk on Mirror (NDoM)構造を作製し、窒素雰囲気下で加熱処理を行うことで散乱強度が約5倍に増強されることを見出した。さらに、散乱増強の要因について、有限差分時間領域 (FDTD) 法を用いた解析を行い、加熱による径と高さの変化に加え、構造が丸みを帯びた半球状に変化したことが要因であることを示した。 ・ 評価を受けた点: 発光増強などの応用において重要であると考えられる散乱強度増大の要因を明らかにした点	第85回 応用物理学会秋季学術講演会/ (2024/9/16~2024/9/20)	【大会概要】 応用物理学会が主催する学術講演会で、春と秋に年に2回、産官学を問わず、多岐にわたる応用物理学に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。秋季は約6,000名が参加し、4,000件におよぶ講演が行われます。 【規模】 参加者数: 約6,000人 ポスター発表数: 901件 受賞者数: 17名
工学研究科	SHI YUTING	し うてい	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Student Paper Award」を受賞した。 ・ 標題「Enhanced Performance of Organic Transistor Memories Using Solution-Processed Organic Floating-Gate Layers」 ・ 内容: 真空蒸着した有機半導体層 (pentacene及びDph-DNTT) を塗布成膜した高分子絶縁体と可溶性低分子半導体の垂直相分離によって自発形成された有機フローティングゲート層を組み合わせることで、不揮発性有機トランジスタで実用上重要となる高い電流オンオフ比と長期間の電荷保持特性、曲げ特性に対する高い耐久性を達成できることを示した。 ・ 評価を受けた点など: 有機フローティングゲートメモリで良好なメモリ動作を得るためには有機トンネル絶縁膜の膜厚を精密に制御する必要があるが、通常は困難である。本研究では、高分子絶縁体と可溶性低分子半導体の混合膜で生じる垂直相分離現象を利用することでこれを改善した。更に、測定に対する耐久性、熱安定性、曲率半径3.6 mmまで繰り返し曲げても特性劣化を殆ど示さないことを実証したことが評価をされたものと考えている。	The 31st International Display Workshops (IDW '24) / (2024/12/4-6)	【大会概要】 年に1回、ディスプレイ分野に関する研究成果の発表、議論を行うアジア最大級の国際会議である。ディスプレイ分野で主要な会議の1つであり、産学官の多数の研究者が国内外から参集する。 【規模】 参加者数: 1,153人 発表数: 513件 (ポスター発表含む) 受賞者数: 16名 (Best Student Paper Award)
工学研究科	奥田 萌斗	おくだ もえと	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Poster Presentation Award, Silver Prize」を受賞した。 ・ 標題「Low-Voltage Upconversion Organic Light-Emitting Diodes with Solution-Processed Donor/Acceptor Layers via One-Step Spin-Coating」 ・ 内容 これまでに報告されたバンドギャップエネルギー以下からの発光が可能な低電圧有機発光ダイオード (OLED) は真空蒸着を用いて作製されてきたが、本研究においては新たに高分子半導体をアクセプター材料に用いて垂直相分離を利用することで初めて低電圧発光が可能なOLEDを塗布プロセスで作製することに成功した。 ・ 評価を受けた点 塗布成膜において、垂直相分子を用いることで従来の真空蒸着よりもはるかに簡易的な作製法でドナーアクセプターの2層膜の成膜を実現し、Exciplex sensitize TTAを用いた低電圧OLEDを実現できたことが評価されたものと考えられる。	The 16th Asian Conference on Organic Electronics (A-COE2024) (2024/11/19-22)	【大会概要】 年に1回、アジアで行われる有機半導体分野の代表的な国際会議であり、有機EL、有機トランジスタ、有機薄膜太陽電池や有機無機ペロブスカイト太陽電池等について議論を行う。アジアを問わず世界各国の著名な研究者が集い、議論を行う世界的に知名度の高い学会である。 【規模】 参加者数: 183人 発表者: 142名 (ポスター発表含む) 受賞者: 7名、うちSilver Prize3名

工学研究科	服部 秀政	はっとり しゅうせい	<p>①右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Poster Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Wavelength Dependent Programming Characteristics of Organic Synaptic Transistors with Organic Floating Gates」 ・ 内容：フローティングゲートに可溶性ペンタセン、有機半導体層にジナフトチエノチオフェン用いた有機トランジスタメモリにおいて、照射光に応じて異なるシナプス特性が現れることを見出し、特性発現に有機材料を用いたフローティングゲート層での光キャリア生成が関与することを示唆する結果を得た。有機フローティングゲートメモリにおいて青色光照射下での書込みによってアナログシナプスデバイスへの応用に適したコンダクタンス特性を実現でき、その応用可能性をパターン認識のシミュレーションによって検証した。 ・ 評価を受けた点など：有機トランジスタメモリのシナプス応用に関する研究は他に例が少なく、有機メモリでパターン認識の学習に対する高い正答率が得られることをいち早く実証できたことが評価されたものと考えられる。 <p>②右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「スチューデントアワード」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「波長可変特性を有する有機フローティングゲートトランジスタメモリのシナプスデバイスへの応用」 ・ 内容：有機フローティングゲートメモリにおいて青色光照射下での書込みによってアナログシナプスデバイスへの応用に適したコンダクタンス特性を実現でき、その応用可能性をパターン認識のシミュレーションによって検証した。また、赤色光照射下での書込みによってニューロモルフィックビジョンセンサへの応用に適した保持減衰を実現し、実際のデバイスを用いたデモンストレーションを行った。 ・ 評価を受けた点など：著者らが開発した有機トランジスタメモリにおいて得られたシナプス特性複が数のタスクをこなし、パターン認識における画像処理と解析に大きな影響を与えることを見出したことが評価されたものと考えられる。 	<p>① The 2024 KJF-International Conference on Organic Materials for Electronics and Photonics (KJF-ICOMEPEP 2024)/ (2024/8/28-31)</p> <p>② 薄膜材料デバイス研究会 第21回研究集会/ (2024/11/28-29)</p>	<p>①【大会概要】年に1回、議論を行う日韓で交互に隔年開催しており、基本的な材料合成や薄膜の作製からLED、FET、メモリデバイス、太陽電池、生体センサーといった応用分野に至るまで、幅広いトピックを取り扱う当該分野の国際会議では大きな会議の一つである。</p> <p>【規模】参加者数：278人 発表数：191件（ポスター発表含む） 受賞者数：10名</p> <p>②【大会概要】年に1回、シリコン、酸化物材料及び有機材料を用いた半導体薄膜の電子物性とそのデバイス応用に関する研究成果を分野の垣根を超えて、発表、議論を行う全国規模の学会である。</p> <p>【規模】参加者数：121人 発表数：50件（ポスター発表含む） 受賞者数：5名</p>
工学研究科	小泉 太護	こいずみ だいご	<p>新規超伝導体の発見に関する研究業績が、国際的学術誌に第1著者として掲載された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題: Superconductivity in ternary germanite TaAlxGe2-x with a C40 chiral structure ・ DOI: 10.35848/1347-4065/ad920a ・ 内容: キラルな結晶構造を有する新規キラル超伝導体TaAlxGe2-xを発見し、本物質が第II種超伝導体であることを明らかとした。 ・ 評価を受けた点: キラル超伝導体の報告が数件しか無い状況下で新しいキラル超伝導体を発見した点、この新物質がクーパー対のスピン重項・スピン三重項混合状態という非常に稀な超伝導状態の形成を示唆している点が高く評価された。 	<p>学術誌名: Japanese Journal of Applied Physics 63, 123002 (2024)</p> <p>著者名: D. Koizumi, S. Kisanuki, K. Monden, Y. Kousaka, H. Shishido, and Y. Togawa</p> <p>出版日: 2024年12月9日</p>	<p>学術誌の概要: 応用物理学分野における英文での総合学術雑誌。日本応用物理学会が刊行、IOP出版社が発行。1962年7月に創刊。全世界から論文が投稿され、査読を通過した学術論文のみが掲載される。</p> <p>追記事項: 本論文の内容を2024年秋季 低温工学・超電導学会でポスター発表したところ、低温工学・超電導学会から高く評価を受けて低温工学誌の解説記事（招待論文）の執筆を依頼を受けた。低温工学誌に第1著者として2025年1月31日に投稿済み。</p>
工学研究科	荒川 颯哉	あらかわ そうや	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「ICEMS2024 Student Paper Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Online MTPA Angle Search Method Using Flux Linkage Plane Estimation of SynRM」 	<p>27th International Conference on Electrical Machines and Systems (ICEMS2024-Fukuoka) (2024/11/26～29)</p>	<p>【大会概要】開催国を変えながら年1回行われる電気機器とそのシステムに関する国際会議です。</p> <p>【規模】参加者数: 848名 発表数: 627件 受賞者数: Student Paper Award 8名</p>

工学研究科	岩本 空果	いのもと そらか	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Analyst Poster Prize」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Fundamental investigation on fluoruous nanoemulsion optodes for highly selective PFOS sensing」 ・ 環境汚染物質PFOSを迅速に検出するためのナノエマルジョン型オプトードを開発し、高選択的センシングのための基礎的検討を行った。 	RSC-JAIMA Symposium on Analytical Chemistry 2024: Bioanalysis for personalized medicine/(2024/09/05-06)	<p>【大会概要】 英国王立化学会（RSC）と日本分析機器工業会（JAIMA）がジョイントで毎年行っている分析化学に関する国際会議です。</p> <p>【規模】 参加者数：200人 発表数：106件（ポスター発表含む） 受賞者数：10名、うち岩本さんが受賞したAnalyst Poster Prizeはトップ3名 備考：国際会議のOrganizingに関わっているため、賞状の授与者の一人が指導教員の久本になっていますが、賞の採点には一切関与していません。念のため。</p>
工学研究科	野村 圭吾	のむら けいご	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生ポスター発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「珪化カルシウムを用いたNi担持触媒の調製とCO2資源化への応用」 	第134回触媒討論会/ (2024年9月18日（水）～20日（金）)	<p>【大会概要】 年に2回、春と秋に開催され、産学官を問わず触媒分野に関する研究成果の発表と討論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：約1,000人 発表数：105件（ポスター発表） 受賞者数：8名（学生ポスター発表賞）</p>
工学研究科	重野 天郁	しげの たかふみ	<p>右記の学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「BEST POSTER AWARD」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発表題目：「Pre-sodiated Na_xP as Electrode Materials for All-Solid-State Sodium Secondary Batteries」 ・ 内容：初期クーロン効率の向上にむけて、リンに対してナトリウムを予め含有させたNa_xPを作製し、その結晶構造と電気化学的特性を評価した。 	14th Japan-France Joint Seminar on Batteries/ (2024/9/4-7)	<p>【大会概要】 2年に1回、日本とフランスの間で開催される電池に関する共同セミナー。フランスと日本の研究者向けの最新の次世代バッテリーについての研究成果の発表、議論を行う国際学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：約100人 発表数：85件（先生の口頭発表: 43件、先生のポスター発表: 7件、学生のポスター発表: 35件） 受賞者数：5名（学生ポスター発表35名のうち）</p>
工学研究科	平岡 大幹	ひらおか だいき	<p>右記の論文が国際的学術誌『ACS Applied Energy Materials』に掲載された。</p> <p>『ACS Applied Energy Materials』は、アメリカ化学会(ACS)が発行する査読付き国際的学術誌で、エネルギー関連材料の研究を中心に扱っている。</p>		<p>【論文詳細】 "LiNiO₂-Li₂MnO₃-Li₂SO₄ Amorphous-Based Positive Electrode Active Materials for All-Solid-State Lithium-Ion Batteries" D. Hiraoka, Y. Fujita, M. Takatsu, H. Tsukasaki, H. Nakajima, S. Mori, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi ACS Appl. Energy Mater., 8 [1] 403-411 (2025). https://doi.org/10.1021/acsaem.4c02508 Accepted: 2024/12/9, Published: 2024/12/17</p>
工学研究科	井上 義文	いのうえ よしふみ	<p>以下の著名な国際学術誌へ第一著者として論文が掲載された。</p> <p>Enhancing D-lactic acid production by optimizing the expression of D-LDH gene in methylotrophic yeast Komagataella phaffii. Y. Inoue, R. Yamada*, T. Matsumoto, H. Ogino, Biotechnology for Biofuels and Bioproducts, 17, 149 (2024) https://doi.org/10.1186/s13068-024-02596-0 掲載日：2024/12/22</p>	Published online: 22 December 2024	<p>Biotechnology for Biofuels and Bioproducts CiteScore 11.1, 最大パーセンタイル 91% Impact Factor 6.1</p>

工学研究科	大橋 歩実	おおはし あゆみ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け以下の章を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 化学工学会第55回秋季大会「優秀ポスター賞」 標題「両親媒性細孔を持つシクロデキストリン型 MOF 粒子への複数薬物包摂に関する数値シミュレーション」 9th Asian Particle Technology Symposium (APT2024)「Best Poster Presentation Award」 標題「Molecular simulation of multi-drug encapsulation into metal-organic framework with amphiphilic pores」 <p>右記の国際的な学術誌へ論文等が掲載された。 Application of cyclodextrin-based metal-organic frameworks for multi-drug carriers: A combined experimental and simulation study A. Ohashi, K. Ohshima, S. Ohsaki*, H. Nakamura, S. Watano Int. J. Pharm., 670, 125104 (2025) https://doi.org/10.1016/j.ijpharm.2024.125104</p>	<p>化学工学会第55回秋季大会 (2024/9/11-13)</p> <p>9th Asian Particle Technology Symposium (APT2024) (2024/12/1-4)</p> <p>International Journal of Pharmaceutics</p>	<p>化学工学会第55回秋季大会 【大会概要】 年に2回、産官学を問わず、化学工学に関する研究成果の発表・議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 対象ポスター発表数：100件、受賞者数：19名</p> <p>APT2024 【大会概要】 4年に1回、産官学を問わず、粉体工学に関する研究成果の発表・議論を行う国際会議です。 【規模】 対象ポスター発表数：100件 受賞者数：10名 『The International Journal of Pharmaceutics』は、366誌のジャーナルの中で「薬学・薬理学」カテゴリにおいて3番目に多く引用されているジャーナルであり、薬剤、ワクチン、生物製剤のデバイスやデリバリーシステムの物理的、化学的、生物学的特性（設計、製造、評価を含む）に関心を持つ製薬科学者にとって真のホームグラウンドとなっています。これには、薬剤、界面活性剤やポリマーなどの添加物、および新規材料の特性評価も含まれます。本誌には、製薬ナノテクノロジーと個別化医療に関する特別セクションがあり、研究論文、レビュー、解説、編集者への手紙、および特別号を掲載しています。</p>
工学研究科	林 絹子	はやし きぬこ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Student Presentation Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Sensitivity analysis of DEM parameters on bulk powder properties」 	<p>9th Asian Particle Technology Symposium (APT2024) (2024/12/1-4)</p>	<p>【大会概要】 4年に1回、産官学を問わず、粉体工学に関する研究成果の発表・議論を行う国際会議です。 【規模】 対象ポスター発表数：100件 受賞者数：10名</p>
工学研究科	桑田 憲甫	くめだ けんすけ	<p>右記の国際的な学術誌へ論文等が掲載された。 Relationship between the agitation torque of the wet iron ore powder and pellet properties K. Kumeda, H. Nakamura*, S. Ohsaki, S. Watano, S. Fujiwara, Y. Iwami, A. Murao ISIJ International, 65, 62-69 (2025) https://doi.org/10.2355/isijinternational.ISIJINT-2024-281</p>	<p>ISIJ International</p>	<p>「ISIJ International」は1961年 Tetsu-to-Hagané Overseas として創刊、1966年 Transactions of The Iron and Steel Institute of Japan、1989年 ISIJ International と誌名を改め、現在に至っています。</p> <p>本誌は金属・材料系でも世界有数の英文学術論文誌であり、会員に限らず広く国内外から投稿される論文と編集委員会が依頼する Review 記事を掲載しています。また、編集企画は国内の編集委員だけではなく、国外の権威ある研究者から構成される Advisory Board により国際的に進められています。</p>
工学研究科	佛圓 大河	ぶつえん たいが	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生優秀講演賞 優秀賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「低温焼鈍によるCu/Cu4Ti複相合金線材の強度向上」 ・ 内容：時効析出型Cu-Ti合金の低温焼鈍にともなう強度、導電性、組織構造の変化を評価し、低温焼鈍硬化の発現機構を検討した。 ・ 評価を受けた点：時効析出型Cu-Ti合金の強度-導電性バランスを改善し、実用銅合金最高レベルの線材を作製した点 	<p>日本銅学会第64回講演大会/ (2024/10/18-20)</p>	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、銅および銅合金に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：約500人 発表数：90件 受賞者数：11名（最優秀賞2名、優秀賞9名）</p>
工学研究科	安井 伊吹	やすい いぶき	<p>右記の国際的な英文学術論文誌へ投稿した一般投稿論文（査読付き）が受理され、掲載されるため。 Title "Synthesis of a Platinum Linker Complex as a Scaffold for the Hybridization of Naturally Occurring DNA and Gold Nanoparticles"</p>		<p>【Journal】 Materials Transactions 材料系14学協会が参加している英文学術論文誌で、金属及び関連する電子材料、磁気材料、超電導材料、セラミックス等の先端材料に関する研究成果を対象とする学術論文誌です。 【Accepted】 December 12th, 2024</p>

工学研究科	澤田 徹	さわだ とおる	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生優秀発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「プロバイオティクス大腸菌の外膜小胞高生産株の特性評価」 ・ 内容 <p>学生を対象者とし、口頭発表を通じて、次の3点に基づき評価された。①研究の背景や自身の研究の位置づけを理解しているか、②発表資料の見やすさや発声、発表態度、③結果に対する考察や課題、今後の展開に対する自信の意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 評価を受けた点 <p>上記の3点(理解力、コミュニケーション力、展開力)が高いと評価された。</p>	第76回日本生物工学会大会/ (2024/9/10)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、生物工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会。</p> <p>【規模】 参加者数：1872人 審査対象発表数：236件（すべて口頭発表） 受賞者数：41名、うち学生最優秀発表賞 7名</p>
工学研究科	菅沼 美里	すがぬま みさと	<p>該当学生を筆答著者として英国王立化学会のJournal of Materials Chemistry C誌に学術英語論文を発表した(2025年1月17日 accepted)。</p>	Accepted 17th January 2025	<p>【学術英語論文】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ タイトル：Impact of dihedral angle in aryl group on photocyclization reactivity of inverse-type diarylethenes ・ 著者：Misato Suganuma, Daichi Kitagawa, Shota Hamatani, Hikaru Sotome, Cédric Mittelheisser, Michel silwa, Syoji Ito, Hiroshi Miyasaka, Seiya Kobatake ・ J. Mater. Chem. C, in press. ・ DOI : 10.1039/D4TC04853A ・ 雑誌のImpact factor: 5.7
工学研究科	林 航昊	りん はんはお	<p>①右記の国際学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「THE BEST POSTER PRIZE」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Development of alkaline earth metal oxide-modified CeO2 catalysts for the synthesis of polycarbonate diols from CO2 and 1,6-hexanediol」 <p>②右記の国際学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Outstanding Research Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Direct synthesis of polycarbonate diols from flow CO2 and 1,6-hexanediol over a heterogeneous BaO/CeO2 catalyst」 	<p>①2nd China-Japan Symposium on Catalysis (2ndCJSC)/ (2024/11/3-5)</p> <p>②OKCAT2024(Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis)/ (2024/11/20-21)</p>	<p>①【大会概要】 年に1度の触媒分野に関する研究成果の発表や議論を行う国際学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：228人 発表数：ポスター発表者41名 受賞者数：上記発表者うち同賞受賞者10名</p> <p>②【大会概要】 年に1度の触媒分野に関する研究成果の発表や議論を行う国際学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：54人 発表数：ポスター発表者19名 受賞者数：上記発表者うち同賞受賞者10名</p>
工学研究科	彭 子宸	ほ こしん	<p>①右記の国際学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Hydrogenolysis of polyethylenes over La2O3-CeO2-supported Ru catalysts」 <p>②右記の国際学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Outstanding Research Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Transformation of polyethylenes to valuable chemicals by hydrogenolysis with a heterogeneous Ru/La2O3-CeO2 catalyst」 	<p>①第11回 高分子学会グリーンケミストリー研究会シンポジウム 第25回プラスチックリサイクル化学研究会研究討論会/ (2024/8/7-8)</p> <p>②OKCAT2024(Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis)/ (2024/11/20-21)</p>	<p>①【大会概要】 年に1度の触媒分野に関する研究成果の発表や議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：58人 発表数：ポスター発表者10名 受賞者数：上記発表者うち同賞受賞者3名</p> <p>②【大会概要】 年に1度の触媒分野に関する研究成果の発表や議論を行う国際学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：54人 発表数：ポスター発表者19名 受賞者数：上記発表者うち同賞受賞者10名</p>

工学研究科	山本 竜也	やまもと たつや	<p>右記の産業会より、これまでのファインバブル研究開発、産業創生と振興について顕著な研究業績や将来性を評価され「学生奨励賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「ファインバブル水処理によるOHラジカルを用いた有機物分解反応」 ・ 受賞理由 「受賞者は、酸素ファインバブル水による難分解性有機物の分解について研究を行ってきました。クマリンをOH ラジカルの捕捉剤として用い、クマリン溶液を酸素ファインバブル水によって処理し、酸素ファインバブルの圧壊による大量のOHラジカル発生を示唆を得ました。その成果は2023～2024年の国内学会で発表されました。以上の功績を讃え学生奨励賞を授与いたします。」 	<p>①第二回 ファインバブル産業会 学術表彰 (2024/11/6)</p> <p>【大会概要】 ファインバブル研究における我が国若手研究者の育成、次世代リーダーの活躍を支援することを目的とし、ファインバブル研究の顕著な研究業績を表彰する制度</p> <p>【規模】 受賞者数：11名、うち学生奨励賞9名</p>	<p>②山本君は他には以下の学会にてポスター賞も受賞している。</p> <p>2024年度 プラスチック成形加工学会・関西支部 若手セミナー (2025/1/9)で「ポスター賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「空気ファインバブル水処理に用いる金属種による有機物分解反応の違い」 <p>【規模】 参加者数：26人 受賞者数：ポスター賞3名</p>
工学研究科	小幡 匡	おばた たすく	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「ポスター賞優秀賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「インペプチド結合導入技術を利用した二重特異性抗体の構築」 ・ 内容 次世代バイオ医薬品として注目される二重特異性抗体医薬を製造する上での技術的課題を解決するために、全く新しい抗体改変技術である「インペプチド結合導入技術」を開発し、その有用性を実証した。 ・ 評価を受けた点 など 抗体分子に対して「インペプチド結合」と呼ばれる共有結合を導入する技術は世界初であり、学術的価値だけでなく医薬品開発の観点から産業応用的価値も極めて高い。本研究は以下の国際特許出願にもつながっており、非常に価値ある成果であると捉えている。 <p>【国際特許出願】中西 猛、立花 太郎、北村 昌也、真壁 幸樹、吉村 小緒利、「インペプチド結合形成による新規ポリペプチドの作製方法」、PCT/JP2024/044646 (出願日：2024年12月17日)</p>	<p>第3回 日本抗体学会学術大会/ (2024/12/9～11)</p>	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、抗体研究分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：900人超 ポスター賞応募件数：155件（学生だけでなく企業研究者も応募） 受賞者数：8名</p>
工学研究科	世山 将大	せやま しょうた	<p>右記の学会（国際セッション）において行った発表が評価を受けAward for Encouragement of Researchを受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発表タイトル"Changes in local structure and hardness of Ni-Ti alloy induced by heavy ion irradiation" ・ 審査員及び学会事務局による発表およびプロシーディングス審査による総合評価 	<p>34th Annual Meeting of MRS-Japan (第34回日本MRS年次大会) 国際セッションでの英語発表 (2024.12.17-19)</p>	<p>【大会概要】 年1回材料分野に関する全国規模（海外含む）の学会での国際セッションにて発表。</p> <p>【規模】 参加者数：約1500人 発表数：約1000件 受賞者数：約25名</p>
工学研究科	竹田 晴海	たけだ はるうみ	<p>第一著者として執筆した論文が学術誌"Journal of Chemical Engineering of Japan"に掲載された。</p> <p>内容：金属溶解プロセスから排出されるNOxの除去プロセス設計のために、硝酸濃度と反応温度が硝酸による単金属の溶解反応により気相に放出される NOx の物質質量および組成に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。硝酸による金属(銅, ニッケル, 鉄)の溶解反応を速度論的に解析し、硝酸濃度および反応温度をパラメータとして発生したNOおよびNO2の物質質量を定量的に評価した。</p>		<p>掲載論文のタイトル: "Amount and composition of NOx generated by metal (Cu, Ni, and Fe) dissolution reaction with nitric acid"</p>
工学研究科	永木 勇人	ながき ゆうと	<p>Peer reviewを経て、全国規模である「溶接学会論文集」に対し、主著として投稿していた論文1件の掲載が決定した。</p>	<p>溶接学会論文集</p>	<p>【論文タイトルおよび著者】 耐候性鋼材を用いた鋼床板溶接時の終端割れに関する力学的検討 ■ 永木勇人、手銭永遠、前田新太郎、※柴原正和</p>
工学研究科	橋場 大輔	はしば だいすけ	<p>Peer reviewを経て、全国規模である「溶接学会論文集」に対し、主著として投稿していた論文1件の掲載が決定した。</p>	<p>溶接学会論文集</p>	<p>【論文タイトルおよび著者】 理想化陽解法FEMを用いた大型鋼構造物の溶接組立シミュレーション ■ 橋場大輔、柳沢祐介、本間祐太、山内悠暉、前田新太郎、生島一樹、河原充、※柴原正和</p>

工学研究科	山内 悠暉	やまうち ゆうき	Peer reviewを経て、全国規模である「溶接学会論文集」に対し、主著として投稿していた論文2件の掲載が決定した。	溶接学会論文集	<p>【論文タイトルおよび著者】 発電用プラント配管における溶接熱影響部の余寿命推定に関する検討 ■ 山内悠暉、木谷悠二、※生島一樹、荒井正行、西田秀高、柴原正和</p> <p>データ同化技術を用いた配管溶接継手のクリープ損傷デジタルツインシステム ■ 山内悠暉、木谷悠二、麻寧緒、※生島一樹、柴原正和</p>
工学研究科	朝倉 大智	あさくら たいち	<p>右記の論文が国際的学術誌『Journal of Materials Chemistry A』に掲載された。</p> <p>『Journal of Materials Chemistry A』は、英国王立化学会(Royal Society of Chemistry, RSC)が発行する査読付きの国際的学術誌で、特にエネルギーと持続可能性に関する材料科学を扱っている。</p>		<p>【論文詳細】 "LiF-doped Sulfide Solid Electrolytes with a Stabilized α-Li3PS4 Analog Phase for All-Solid-State Li Metal Batteries" T. Asakura, R. Izawa, T. Kimura, C. Hotehama, H. Kowada, M. Deguchi, K. Motohashi, A. Sakuda, M. Tatsumisago and A. Hayashi J. Mater. Chem. A., 13 [3], 1942-1949 (2025). https://doi.org/10.1039/d4ta06831a Accepted: 2024/12/4, Published: 2024/12/5</p>
工学研究科	加藤 拓也	かとう たくや	Peer reviewを経て、全国規模である「溶接学会論文集」に対し、主著として投稿していた論文1件の掲載が決定した。	溶接学会論文集	<p>【論文タイトルおよび著者】 AI技術とFEM解析を活用した船殻成形の機械化・自動化に関する検討 ■ 加藤拓也、野津亮、生島一樹、※柴原正和</p>
工学研究科	王 聞達	わん ぶんたつ	Peer reviewを経て、全国規模である「溶接学会論文集」に対し、主著として投稿していた論文1件の掲載が決定した。	溶接学会論文集	<p>【論文タイトルおよび著者】 修正熱収縮法の提案とその応用 ■ 王聞達、幅田真史、手銭永遠、前田新太郎、生島一樹、※柴原正和</p>
工学研究科	張 博雲	ちょう はくうん	<p>右記の学会において行った発表が、国際的に優れた内容であると評価を受け「Best Poster Award」を受賞した。</p> <p>・ 標題「Surrogate Model-Assisted Multi-Objective Optimal Design of Energy Storage and Supply Systems」</p> <p>・ 内容：太陽光発電の余剰電力を利用して生成した水素の季節間貯蔵を行うエネルギー貯蔵・供給システムの最適機器構成計画問題を対象に、機械学習に基づく年間運用特性の代理モデルを援用した多目的数値最適化手法を開発した。</p> <p>・ 評価を受けた点：ポスターセッションでの研究内容と質疑応答</p>	The 4th Joint Symposium on Advanced Mechanical Science and Technology (2024/9/25~2024/9/28)	<p>【大会概要】 日本（大阪公立大学、兵庫県立大学）、台湾（国立台湾海洋大学）、中国（福州大学）の機械工学研究者および学生を対象として開催される国際合同シンポジウムである。2年もしくは3年間隔で定期的で開催されており、2016年に福州大学で第1回目が、2018年に大阪府立大学で2回目が、そして2023年には国立台湾海洋大学で3回目が開催された。今回は4回目として兵庫県立大学で開催された。日本、台湾、中国の3か国間で多くの学生を交えた国際交流・議論が積極的に進められた。</p> <p>【規模】 参加者数：約100人 発表数：88件（ポスター発表含む） 受賞者数：5名（いずれもBest Poster Award）</p>

工学研究科	今江 章裕	いまえ あきひろ	<p>以下の規定に従い推薦させていただきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●国際的な学術誌へ論文等が掲載される等優れた功績があったもの ・論文掲載の場合、第1著者または責任著者であることを条件とする。 ・学術雑誌が学術誌（和文・英文）に掲載済みであること <p>今江君第一著者論文 掲載雑誌：IEICE Communications Express 標題：「A low-cost centralized network management method to reduce management workload instead of replacing software-defined networking-enabled network devices」 著者：Akihiro Imae, Yuto Iwasaki, Osanori Koyama, Kanami Ikeda, Makoto Yamada （下線のある著者は推薦者を示す） 巻、号、頁、発行年月：vol. 13, no. 3, pp. 80-83, March 2024 DOI：https://doi.org/10.23919/comex.2023XBL0163 WEB：https://www.jstage.jst.go.jp/article/comex/13/3/13_2023XBL0163/_article/-char/en</p>		<p>掲載雑誌：IEICE Communications Express （同雑誌は、日本の通信研究者が所属する最大の学会である「電気情報通信学会（IEICE）」が発行する論文誌であり、権威のある論文誌であると考えられる。</p> <p>内容：シングルボードコンピュータを使用して OpenFlow ベースのコマンドとベンダー固有のコマンドを変換する新しいアダプタを使用したネットワーク管理方法を提案し、さまざまなベンダーを含む異種ネットワークデバイスの低コストの集中管理を実現した。アダプタは有線および無線ネットワークデバイスに実装され、その動作が検証される。さらに、スマートホームネットワークと中小企業ネットワークの管理という2つのシナリオでコストを比較した。結果は、提案された方法が効率的に機能し、従来の方法よりも低コストであることを示した。</p>
工学研究科	鳥居 真人	とりい まさと	<p>右記の論文が国際的学術誌『Journal of the Ceramic Society of Japan』に掲載された。</p> <p>『Journal of the Ceramic Society of Japan』は、日本セラミックス協会が発行する査読付き国際的学術誌で、セラミックスおよび関連材料の化学と技術に関する研究論文を掲載している。</p>		<p>【論文詳細】 "Evaluation of Ionic Conduction Performance in Li3PS4 Glass Electrolytes Using Block Model Theory" M. Torii, A. Sakuda, T. Onji, M. Tatsumisago and A. Hayashi J. Ceram. Soc. Jpn., 132 [10] 591-596 (2024). https://doi.org/10.2109/jcersj2.24062 Accepted: Jul.9, Published: Oct.1</p>
工学研究科	入井 駿	いりい しゅん	<p>右記の学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「Board Member Selected Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Crystal Structures and Piezofluorochromism of Organoboron Complexes with the [2.2]Paracyclophane Moiety」 ・ 内容：標題に示した化合物の結晶が示す蛍光の圧力応答性の主要因を調査した。 ・ 評価を受けた点：高圧下でのX線結晶構造解析および量子化学計算から、蛍光の圧力応答性の主要因となる電子構造変化を解明した点が評価された。 	The 5th UOH-FZU-OMU Joint International Symposium on Photocatalysis, Photofunctional Materials, Photon-Science, Nano-Science & Technology / (2024/11/26-28)	<p>【大会概要】 大阪公立大学・兵庫県立大学・福州大学が合同で開催し、化学・物理の分野を問わず、光機能に関する広い分野での研究成果の発表、議論を行う国際学会。</p> <p>【規模】 発表数(一般および学生口頭発表)：27件 発表数(学生ポスター発表)：29件 Board Member Selected Award受賞者数：4名</p>
工学研究科	鬼塚 貴大	おにづか たかひろ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Poster Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Experimental analysis of the formation process of magnetite nanoparticles in a mechanochemically assisted synthesis」 ・ 内容：さまざまな用途で用いられている酸化鉄（マグネタイト）ナノ粒子の低環境負荷合成プロセスを開発し、水環境汚染を引き起こす水溶性有機物の分解触媒として有用であることを示した。 ・ 評価を受けた点：研究内容の質、新規性、社会への貢献度および発表者自身の研究内容と周辺領域に対する理解度、本人の創意工夫、説明の分かり易さ、質疑の妥当性など 	15th Korea-Japan Symposium on Materials and Interfaces (15th KJSMI, 2024/11/27-30) (国際大会)	<p>【大会概要】 2年に1回、産官学を問わず、化学工学における材料と界面の分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際会議です。</p> <p>【規模】 参加者数：200人 発表数：ポスター89件 受賞者数：20名</p>
工学研究科	今吉 優輔	いまよし ゆうすけ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「化学工学会 粒子・流体プロセス部会シンポジウム賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「粉体圧縮プロセスでの成型不良発生時における壁面応力測定と錠剤内部構造評価」 	化学工学会第55回秋季大会 (2024/9/11-13)	<p>【大会概要】 年に2回、産官学を問わず、化学工学に関する研究成果の発表・議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 対象口頭発表数：71件 受賞者数：14名</p>

工学研究科	巖 元志	いわお もとし	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Poster Presentation Award」を受賞した。</p> <p>・ 標題「Hot-melt kneading process of sulfur and porous carbon for all-solid-state lithium sulfur batteries」</p>	9th Asian Particle Technology Symposium (APT2024) (2024/12/1-4)	<p>【大会概要】 4年に1回、産官学を問わず、粉体工学に関する研究成果の発表・議論を行う国際会議です。</p> <p>【規模】 対象ポスター発表数：100件 受賞者数：10名</p>
工学研究科	大津 智隆	おおつ ともたか	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Best Student Presentation Award」を受賞した。</p> <p>・ 標題「Influence of the calculation method of liquid bridge force model on DEM simulation of wet powder behavior」</p>	9th Asian Particle Technology Symposium (APT2024) (2024/12/1-4)	<p>【大会概要】 4年に1回、産官学を問わず、粉体工学に関する研究成果の発表・議論を行う国際会議です。</p> <p>【規模】 対象口頭発表数：30件 受賞者数：7名</p>
工学研究科	谷田 大	たにだ まさる	<p>右記の学会誌において論文が掲載された。</p> <p>・ 表題：Suitable Method for Improving Friction Performance of Magnetic Wheels with Metal Yokes</p> <p>・ 内容：鋼構造物走行ロボット用の車輪である遊星歯車式磁石車輪について、摩擦性能を向上させることを目的とした研究です。</p>	Published: 11 October 2024	<p>・ 学術誌名：MDPI Robotics</p> <p>・ 学術誌概要：MDPIが毎月オンラインで発行する、ロボット工学に関する国際的な査読付きオープンジャーナルです。</p> <p>・ インパクトファクター：2.9</p> <p>・ サイトスコア：6.7</p>
工学研究科	Aphayvong Sengsavang	あばいうおん せーん さわーん	<p>全国規模の学術誌に論文が掲載された [論文のタイトル] Enhancement of the piezoelectric properties of (100) BiFeO3 films on Si by all-sputtered epitaxial growth DOI:10.35848/1347-4065/ad6d74 [内容] Si基板上にペロブスカイト型強誘電体薄膜をエピタキシャル成長させることは、膜の圧電性や電気特性を向上させる手法として期待されている。本研究では、バッファ層から強誘電体層までの全膜を単一のスパッタチャンバー内でエピタキシャル成長させることに成功した。この成果は、TiNバッファ層の適用と、PtとTiNの間の密着性を向上させるための密着層の最適化によって達成された。最適化した(100)BiFeO3の製膜条件下では、膜は優れた強誘電性を示し、報告されていたBiFeO3の中で最も大きな圧電定数を得られた結果を示した。</p>	Japanese Journal of Applied Physics, 63, 09SP06 Published : 4 September 2024	<p>[学術誌の概要] Japanese Journal of Applied Physics 1962年7月に日本で創刊された日本の学術誌で、査読された論文のみ掲載される。日本から発信される英文での応用物理学分野における総合学術誌である。</p>
工学研究科	嶋本 健人	しまもと けんと	<p>右記の学会において行った発表が優れた研究発表と評価を受け、「Poster Presentation Award」を受賞した。</p> <p>[発表論文のタイトル] Composition Control of YbFe2O4 Electronic Ferroelectric Thin Films with PLD Growth Process Monitoring [内容] 電子強誘電体YbFe2O4エピタキシャル薄膜の本質的な基礎特性の解明に向け、YbFe2O4 相の形成とFe/Yb 組成を制御する薄膜成長プロセスを開発し、Fe 組成欠損の抑制を試みた。異なる結晶相、組成を持つ合計 6 つの焼結ターゲットを用意し、それらの組み合わせとレーザー照射の同期によって、Fe, Yb 原子の供給比を自在に設計し、化学量論組成からの大きな組成変化の課題を克服した。</p>	The 14th Japan-Korea Conference on Ferroelectricity (JKC-FE14) (2024/8/30-9/1) 発表日：2024/8/31	<p>[大会の概要] この会議は、1994年に釜山大学で開催されて以来、理論と実験の両面から、強誘電体の基礎から応用までの全領域をカバーする学術会議である。日韓両国の研究者の二国間協力を促進し、強誘電体の研究成果や新しいアイデアを交換することを主な目的とする。</p> <p>[規模] 発表者数:69件 受賞者数:9名</p>

工学研究科	井上 達貴	いのうえ たつき	<p>下記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「電気学会優秀論文発表賞」の受賞が決定した。</p> <p>・ 標題「直接トルク制御における最大トルク／磁束制御の制御手法」</p>	電気学会 モータドライブ/回転機/自動車合同研究会 (2024/7/11)	<p>【賞の概要】</p> <p>電気学会の各技術委員会主催研究会における1年間の発表から特に優秀な論文発表が選定される賞 2024年の発表数：155件 受賞者数：4名</p>
工学研究科	桐淵 岳	きりぶち たけし	<p>下記の論文が全国規模の学術誌に掲載され、英文翻訳誌の論文としても選出された。</p> <p>標題：「PMSMの動力線への単相変圧器を用いた位置検出用電力供給のための電力重量制御方法」</p> <p>著者：桐淵 岳, 井上 征則, 森本 茂雄</p> <p>掲載誌・巻・号：電気学会論文誌D（産業応用部門誌）, Vol. 144, No. 8, pp. 613-621, 2024年8月 DOI: https://doi.org/10.1541/ieejias.144.613</p> <p>【翻訳誌】</p> <p>表題: "Power Superposition Control Method of Power for Position Sensor Using a Single-Phase Transformer on the Power Lines of a PMSM"</p> <p>著者: Takeshi Kiribuchi, Yukinori Inoue, Shigeo Morimoto</p> <p>掲載誌：Electrical Engineering in Japan (2025年1月) DOI: https://doi.org/10.1002/eej.23501</p> <p>※論文掲載にかかる工学推薦基準「国際的または全国規模の学術誌へ論文等が掲載される等優れた功績があったもの」</p>		<p>電気学会論文誌D（産業応用部門誌）は、大学等の教育研究機関のみならず、産業界も含めて幅広い技術者・研究者が投稿・閲覧している論文誌である。本論文誌に掲載されることは、世界でも日本が中心的役割を担う電気機器、モータ設計・制御、パワーエレクトロニクス分野で評価された研究であることを意味する。</p> <p>また、翻訳誌Electrical Engineering in Japanは、John Wiley & Sons社が電気学会論文誌A～Eに掲載された和文論文の一部を、英語に翻訳して出版している。すべての論文を翻訳誌に掲載している訳ではないため、選出されることは、国際的にも評価される研究であることを意味する。</p>
工学研究科	藤田 侑志	ふじた ゆうし	<p>①右記の論文が国際的学術誌『Materials Advances』に掲載された。 『Materials Advances』は、英国王立化学会(Royal Society of Chemistry, (RSC)が発行するオープンアクセス(OA)の査読付き国際的学術誌で、材料科学分野の幅広い研究を対象としている。</p> <p>②右記の論文が国際的学術誌『The Journal of Physical Chemistry C』に掲載された。 『The Journal of Physical Chemistry C』は、アメリカ化学会(ACS, American Chemical Society)が発行する査読付き国際学術誌で、物理化学の中でも特にナノ材料、エネルギー、電子材料に関連する研究を扱う専門誌である。</p> <p>③右記の論文が国際的学術誌『Journal of the Ceramic Society of Japan』に掲載された。 『Journal of the Ceramic Society of Japan』は、日本セラミックス協会が発行する査読付き国際的学術誌で、セラミックスおよび関連材料の化学と技術に関する研究論文を掲載している。</p> <p>④右記の論文が国際的学術誌『ACS Applied Energy Materials』にアクセプトされた。 『ACS Applied Energy Materials』は、アメリカ化学会(ACS)が発行する査読付き国際的学術誌で、エネルギー関連材料の研究を中心に扱っている。</p>		<p>①【論文詳細】 "Amorphous Li2O-LiI-MoO3 Solid Electrolytes: Mechanochemical Synthesis and Application to All-Solid-State Batteries" Y. Fujita, T. Otono, T. Asakura, J. Ding, H. Tsukasaki, S. Mori, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi Mater. Adv., 5 [19] 7690-7699 (2024). https://doi.org/10.1039/d4ma00663a Accepted: Aug.15, Published: Aug.19</p> <p>②【論文詳細】 "Electrochemical Redox Potential of Li2SO4 Investigated Using the Appropriate All-Solid-State Cell Configuration" Y. Fujita, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi J. Phys. Chem. C, 128 [49] 20774-20781 (2024). https://doi.org/10.1021/acs.jpcc.4c05759 Accepted: Nov.13, Published: Nov.27</p> <p>③【論文詳細】 "Mechanochemical Synthesis of Li2O-LiI-based Solid Electrolytes with Glass-forming Oxides" Y. Fujita, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi J. Ceram. Soc. Jpn., 132 [12] 663-667 (2024). https://doi.org/10.2109/jcersj2.24087 Accepted: Oct.1, Published: Dec.1</p> <p>④【論文詳細】 "Electrode/Electrolyte Interphase Formation by Lithium Iodide in Li2S-Based Positive Electrode for All-Solid-State Batteries" Y. Fujita, J. Ding, H. Kowada, S. Mori, K. Motohashi, A. Sakuda, A. Hayashi ACS Appl. Energy Mater (2025) accepted. Accepted: Jan. 24</p>

工学研究科	韓 佳虎	かん かと	<p>○右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「YABEC2024 Poster Award」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題：Reshaping the substrate-binding pocket of acyl-ACP reductase to enhance the production of sustainable aviation fuel in Escherichia coli ・ 著者：Jiahu Han, Takuya Matsumoto, Ryosuke Yamada, Hiroyasu Ogino <p>○以下の著名な国際学術誌へ第一著者として論文が掲載された。 J. Han, T. Matsumoto, R. Yamada, and H. Ogino, Reshaping the substrate-binding pocket of acyl-ACP reductase to enhance the production of sustainable aviation fuel in Escherichia coli, Biotechnology and Bioengineering Vol. 122, pp. 211-222 (2025). doi: 10.1002/bit.28863</p> <p>J. Han, T. Matsumoto, R. Yamada, and H. Ogino, Introducing glutamic acid residues to acyl-ACP reductase to enhance alka(e)ne production in Escherichia coli computer-aided design and subsequent experimental validation, Biochemical and Biophysical Research Communications Vol. 745, 151237 (Total 12 pages) (2025). doi: 10.1016/j.bbrc.2024.151237</p>	29th Symposium of Young Asian Biological Engineers' Community (YABEC2024)/ (2024/10/17-19)	<p>【大会概要】 年に1回、生物工学分野に関する研究成果の発表、議論を行うのアジアの若手研究者の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：176人 ポスター発表数：106件 受賞者数：16名</p>
工学研究科	磯辺 菜実	いそべ まみ	<p>該当学生を筆答著者としてSmall Methods誌（Wiley）に学術英語論文を発表した(2025年1月3日 accepted、2025年1月19日オンライン掲載、in press)。</p> <p>第53回 結晶成長国内会議において行ったポスター発表が優れた内容であると評価を受け「学生ポスター賞」を受賞。</p> <p>【学生ポスター賞】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 講演題目：「昇華法を用いたフォトクロミックジアリールエテン結晶の一次元パターンニング」 ・ 内容：微細な凸型構造を有するガラス基板上の昇華させることにより、フォトクロミック結晶を凸型パターン上に並べること成功し、光応答性結晶材料の新たな可能性を見出した。 ・ 評価を受けた点：特異な結晶成長現象を、自作の基板・独自の昇華技術を用いて見出したことが、聴衆からの高い評価を受けた。 	<p>【学生ポスター賞】 第53回 結晶成長国内会議 (2024/12/18-20) 学会の概要：結晶成長の基礎から各分野での結晶の応用研究や結晶成長観察・評価技術に関する最新の研究成果が報告される全国規模の学会です。 学会の規模：参加者数：おおよそ160人、発表数：95件（ポスター発表含む）、受賞者数：28名（内、ポスター賞12名）</p>	<p>【学術英語論文】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ タイトル：Patterning of Photochromic Diarylethene Crystals by Sublimation for Morphological Controls ・ 著者：Mami Isobe, Daichi Kitagawa, Seiya Kobatake ・ Small Methods, 2401545 (Total 8 pages) in press (2025). ・ DOI: 10.1002/smt.202401545 ・ 雑誌のImpact factor: 10.7
工学研究科	濱谷 将太	はまたに しょうた	<p>該当学生を筆答著者としてドイツ化学会のAngewandte Chemie International Edition誌に学術英語論文を発表した(2024年8月28日 accepted、2024年12月16日掲載)。</p>	Accepted manuscript online: August 28, 2024	<p>【学術英語論文】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ タイトル：Aza-diarylethenes undergoing both photochemically and thermally reversible electrocyclic reactions ・ 著者：Shota Hamatani, Daichi Kitagawa, Seiya Kobatake ・ Angew. Chem. Int. Ed., 63(51), e202414121 (Total 9 page) (2024). ・ DOI: 10.1002/anie.202414121 ・ 雑誌のImpact factor: 16.1
工学研究科	音野 智哉	おとの ともや	<p>右記の論文が国際的学術誌『RSC Applied Interfaces』に掲載された。</p> <p>『RSC Applied Interfaces』は、英国王立化学会(Royal Society of Chemistry)が発行する表面および界面の応用研究に特化した学際的な査読付きの国際学術誌である。</p>		<p>【論文詳細】 "Preparation and Characterization of New Solid Electrolytes Na3-xZn1-xAl1+xS4" T. Otono, H. Ben Yahia, C. Hotehama, K. Motohashi, A. Sakuda and A. Hayashi RSC Appl. Interfaces, 1 [6] 1419-1425 (2024). https://doi.org/10.1039/d4if00275j Accepted: 9/10, Published: 9/11</p>
工学研究科	重富 竜輝	しげどみ たつき	<p>右記の論文が国際的学術誌『Journal of Power Sources』に掲載された。</p> <p>『Journal of Power Sources』は、エルゼビア社が発行する査読付き国際的学術誌で、電気化学的エネルギー変換に関する論文を対象としている。</p>		<p>【論文詳細】 "High-Capacity and Long-Cycle Life Li2S-V2S3-V2O3-LiI Bifunctional Materials for All-Solid-State Li/S Batteries" T. Shigedomi, Y. Fujita, D. Horiuchi, M. Osaki, K. Motohashi, H. Tsukasaki, H. Nakajima, S. Mori, M. Tatsumisago, A. Sakuda and A. Hayashi J. Power Sources, 629 (235831) 1-8 (2025). https://doi.org/10.1016/j.jpowsour.2024.235831 Accepted: Nov.9, Published online: Nov.30</p>

工学研究科	谷垣 隼大	たにがき はやた	<p>右記の論文が国際的学術誌『Chemical Communications』に掲載された。</p> <p>『Chemical Communications』は、英国王立化学会(Royal Society of Chemistry)が発行する査読付きの国際的学術誌で、化学全般に関する論文を対象としている。</p>		<p>【論文詳細】</p> <p>"Liquid-Phase Synthesis of Li4GeS4 and Li10GeP2S12 Electrolytes Using Water as the Main Solvent"</p> <p>H. Tanigaki, T. Kimura, E. Kurioka, K. Motohashi, A. Sakuda, M. Tatsumisago and A. Hayashi Chem. Commun., 61 [4] 705-708 (2025). https://doi.org/10.1039/d4cc04708g Accepted: 12/2, Published: 12/3</p>
農学研究科	中村 綾那	なかむら あやな	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「バカマツタケの香気成分に関する研究」 ・ 内容： バカマツタケでも、マツタケと同様の経路を経て桂皮酸メチルを生成すると考えられるが、その生成条件や生成に関与する酵素に関しては明らかにされていない。そこで本研究では、バカマツタケにおける桂皮酸メチル生成に関与する酵素について調べることが目的とした。桂皮酸メチルの生成量は菌糸体がほとんど生育していない時期から生成し、培養日数の経過に伴い増加した。明培養と暗培養を比較すると、いずれも培養40日目ごろに桂皮酸生成量のピークを迎え、暗培養が明培養の約2倍量の桂皮酸メチルを生成した。 ・ 評価を受けた点など：研究のオリジナリティ、科学的レベル、きのこ産業に与える影響など 	日本きのこ学会第 27 回大会 (2024/9/3~4)	<p>【大会概要】</p> <p>年に1回、産官学を問わず、きのこ分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：500人 発表数：30件（ポスター発表含む） 受賞者数：5名、うち学生最優秀発表賞1名、学生優秀発表賞4名 など</p>
農学研究科	垣内 憲吾	かきうち けんご	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「モリブデン貯蔵タンパク質を利用した人工ハイパーアキュムレーター構築」 ・ 内容：モリブデン貯蔵タンパク質とモリブデンを輸送する膜貫通タンパク質を大腸菌に共発現させることで、溶液中のモリブデンを回収できる微生物を構築した。 ・ 評価を受けた点：1) 研究に対して発表者が十分に寄与していること、2) 質疑応答に優れていること、3) 独自性が認められ、今後の発展が期待できること 	日本化学会秋季事業 第14回 CSJフェスタ2024 (2024/10/22~24)	<p>【大会概要】</p> <p>年に1回、化学に関して産学官の研究者が集まり研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：2700人 発表数：1086件（ポスター発表のみカウント） 受賞者数：199名</p>
農学研究科	松本 航紀	まつもと こうき	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「エナンチオ分岐型の人工カルボニル還元酵素の創製」 ・ 内容：医薬品合成の中間体として需要の高い光学活性アルコールを、非常に高い立体選択性で作り分けることができる、カルボニル還元酵素を構築した ・ 評価を受けた点：1) 研究に対して発表者が十分に寄与していること、2) 質疑応答に優れていること、3) 独自性が認められ、今後の発展が期待できること 	日本化学会秋季事業 第14回 CSJフェスタ2024 (2024/10/22~24)	<p>【大会概要】</p> <p>年に1回、化学に関して産学官の研究者が集まり研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：2700人 発表数：1086件（ポスター発表のみカウント） 受賞者数：199名</p>
農学研究科	森川 才翔	もりかわ さいと	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀ポスター発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「金属結合部位を最適化したタンパク質配位子ライブラリーの拡充」 ・ 内容： リモート金属結合部位の最適化という、新規性の高い手法によって立体選択的なマイケル付加反応を触媒する酵素を構築した。 ・ 評価を受けた点：1) 研究に対して発表者が十分に寄与していること、2) 質疑応答に優れていること、3) 独自性が認められ、今後の発展が期待できること 	日本化学会秋季事業 第14回 CSJフェスタ2024 (2024/10/22~24)	<p>【大会概要】</p> <p>年に1回、化学に関して産学官の研究者が集まり研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：2700人 発表数：1086件（ポスター発表のみカウント） 受賞者数：199名</p>
農学研究科	重村 愛貴	しげむら よしき	<p>右記の学会において行ったポスター発表が、優れた内容であると評価を受け「技術報告部門優秀ポスター賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「大阪湾の種子供給から見る海浜植生維持の可能性」 ・ 内容 大阪湾の天然および人工の砂浜において漂着種子を調査し、発芽能力を調べることにより、大阪湾における海浜植物の自然維持の可能性と適切な管理手法を検討した。 ・ 大阪湾における初の漂着種子の報告であるとともに、人工海浜の適切な整備・管理により大阪湾岸の自然再生の可能性を示したことが評価された。 	第55回 日本緑化工学会大会/ (2024/9/14)	<p>【大会概要】</p> <p>緑化分野に関連する産官学の会員が、研究成果の発表や議論を行う年1回の全国規模の学会。</p> <p>【規模】</p> <p>参加者数：300人 発表数：65件 受賞者数：3名、うち術報告部門受賞1名</p>

農学研究科	久井 花恋	ひさい かれん	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「若手ポスター発表賞」および「女性ポスター発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「Effects of wing color change caused by alien host plant on mating behavior of a lycaenid butterfly, <i>Tongeia fischeri</i>」 ・ 内容：クロツバメシジミ <i>Tongeia fischeri</i> は、岩場や河川敷に生息するが、開発などによって生息地が減少し、環境省の準絶滅危惧に選定されている。本種の幼虫は、主に在来種のツメレンゲを利用するが、近年、外来種のマンネングサ属の利用が各地で確認されている。本研究では、本種幼虫を異なる寄主植物で飼育し、得られた成虫の翅の色彩を比較するとともに、外来植物の利用にともなう配偶行動や生活史同調への影響を検証した。 	XXVII International Congress of Entomology (第27回国際昆虫学会議) (ICE2024) (2024/8/25~2024/8/30)	<p>【大会概要】4年に一度、世界中のあらゆる分野の昆虫学者が集まる国際会議です。</p> <p>【規模】 参加者数：4278人 (82カ国) 発表数：2817件 (ポスター発表含む)</p>
農学研究科	吉田 麟太郎	よしだ りんたろう	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「若手ポスター発表優秀賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 演題「シロイヌナズナの根におけるホウ酸トランスポーターBOR1の細胞内偏在機構の解明」 	日本土壤肥科学会2024年度福岡大会/ (2024/9/3~5)	<p>【大会概要】 年に1回、土壌学、肥料学、植物栄養学、環境科学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：約1,000人 発表数：482件 (ポスター発表含む) 受賞者数：29名、うち若手ポスター発表優秀賞17名</p>
農学研究科	隠田 美咲	おんだ みさき	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生最優秀発表賞」と「ポスター賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「アミスギタケの子実体形成に及ぼすアミノ酸の添加効果」 ・ 内容：本研究ではアミノ酸添加によるアミスギタケの子実体形成への影響を調べ、子実体形成について新たな知見を得ることを目的とした。また、スレオニン添加区による形態変化に関するタンパク質の同定を目指して研究を行った。スレオニン濃度依存的な原基・子実体本数の増加および子実体形成の遅れが認められた。SAM代謝経路の酵素タンパク質の発現を調べたところ、スレオニン添加により発現が変動することが明らかとなった。 ・ 評価を受けた点など：研究のオリジナリティ、科学的レベル、きのこ産業に与える影響など 	日本きのこ学会第27回大会 (2024/9/3~4)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、きのこ分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：500人 発表数：30件 (ポスター発表含む) 受賞者数：5名、うち最優秀発表賞1名 など</p>
農学研究科	辻本 健登	つじもと けんと	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「トビックス賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「PET分解活性を有する酵素の機能解明に関する研究」 ・ 内容：PETは化学的方法で解重合できるが、高温高压で反応させる必要があるため環境に優しい方法とはいえない。それに対しPETの生物学的もしくは生化学的分解は穏やかな反応条件で起こるため環境に優しい方法である。シマミズで恒常的に発現している酵素が副次的・偶発的にPETやBHETを分解していることを明らかにした。さらに、これまで報告されているPET、BHET分解酵素は α/β hydrolase であり、セリンプロテアーゼと同様の触媒残基を持つことが知られている。そこで、他の生物由来のセリンプロテアーゼやエステラーゼを用いてBHET分解活性を調べたところ、強い活性を示すエステラーゼが存在することを明らかにした。 ・ 評価を受けた点など：社会的インパクト、農芸化学らしさ、科学的レベルなど 	2025年度日本農芸化学会大会(2025/3/4~8)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、農芸化学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：5000人 発表数：2500件 (ポスター発表) 受賞者数：25名、(トビックス賞)</p> <p>※日本農芸化学会より受賞メール (2025.1.7付)</p>
農学研究科	佐々木 晴紀	ささき はるき	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「若手優秀発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「電子伝達体キノンの改変による嫌気下物質生産向上を目指した研究」 ・ 内容 化石燃料に依存しない物質生産「バイオリファイナリー」において、嫌気培養には多彩な物質を生産できるポテンシャルがあるが、還元力のリサイクル低下のため代謝が停滞するという問題点がある。そこで、電子伝達系を改変することにより、嫌気培養時に生じる還元力を、還元反応による物質生産に活用する系の開発を目指した。ユーグレナのロドキノン合成能力を大腸菌に付与することで、嫌気下でのコハク酸生産能力の向上につながることを見出した。 ・ 評価を受けた点 低炭素社会の構築に向けてバイオリファイナリーの発展は重要であるが、それぞれの物質生産系の各論に留まることが多いのが現状であった。本研究では、嫌氣的バイオリファイナリーに共通した戦略としての電子伝達系改変技術というコンセプトの実証を行うことに成功した。今後他の研究と組み合わせた発展を期待しての受賞と考えている。 	第39回ユーグレナ研究会研究集会/ (2024/10/26)	<p>【大会概要】 年に1回、ユーグレナおよび微細藻類を中心とした研究成果の発表、議論を行う研究会です。</p> <p>【規模】 参加者数：100名程度 発表数：24件 受賞者数：5名</p>

農学研究科	北村 心	きたむら ころ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀発表賞」を受賞した。</p> <p>・ 標題「Collimonas fungivoransが生産する真菌の形態や成長に影響を及ぼす化学因子」</p>	第37回 日本微生物生態学会/ (2024/10/31)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、微生物分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：754人 発表数：133件（ポスター発表） 受賞者数：14名</p>
農学研究科	今西 優斗	いまにし ゆうと	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「第47回日本分子生物学会年会ポスター賞（MBSJ-EMBO Poster Award）」を受賞した。</p> <p>・ 標題「甲状腺濾胞癌由来FAM19A2がマクロファージ分極化に与える影響の評価」</p> <p>・ 内容 甲状腺の濾胞癌は術前の悪性度評価及び良性濾胞性腫瘍との鑑別が困難であるため、本来手術不要な低リスク腫瘍に対しても甲状腺摘出手術が施されている可能性がある。そのため、甲状腺を温存できる投薬治療の可能性を拓く治療薬の開発は有意義であり、創薬標的の同定が望まれている。応募者が所属する研究室の先行研究において、ケモカイン様分子をコードするFAM19A2のスプライシングバリエントが濾胞癌特異的に高発現し、腫瘍の悪性度を評価するバイオマーカーとして有望であることが見出された。しかし、濾胞癌におけるFAM19A2の機能は不明である。腫瘍微小環境中の腫瘍関連マクロファージはその分極化の調節を介して癌の増殖を促進することが知られているため、本研究では、FAM19A2がマクロファージ分極化に与える影響を細胞レベルで評価した。その結果、FAM19A2がマクロファージ極性化に影響を与えることが明らかとなった。</p> <p>・ 評価を受けた点など 「…1,385件のエントリーをいただき、1次審査通過演題は312件、2次審査の結果、ポスター賞授賞演題は41件（全エントリー演題中3%）となりました。」※年会web (https://www.aeplan.jp/mbsj2024/poster_award.html) より抜粋</p>	第47回 日本分子生物学会年会/ (2024/11/28)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、分子生物学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模、かつライフサイエンス分野における国内最大級規模の学会です。</p> <p>【規模】 会員数：12,054 参加者数：6,614 一般演題発表件数：2,958（すべてポスター発表） ポスター賞（MBSJ-EMBO Poster Award）受賞者数：41 ※以下参考資料 https://www.aeplan.jp/mbsj2024/poster_award.html （ポスター賞受賞者） https://mbsj.jp/admins/index.html （学会の概要） https://www.mbsj.jp/meetings/annual/index.html （各年会に関する統計データ等）</p>
農学研究科	井上 佳穂	いのうえ かほ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「若手優秀発表賞」を受賞した。</p> <p>標題「励起蛍光マトリクスおよび並列因子分析を用いた糖化反応の解析」</p> <p>支部大会での受賞ではあるが、本学会が受け入れる学問分野の領域は広範で食品全般を対象としており、かつ研究成果発表のレベルは全国大会と同等である。その中には、海外の研究機関や全国規模の関連企業との共同研究も含まれている。また、支部の範囲は、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取、岡山、徳島、香川、高知と広い。さらに、過去の学長表彰の推薦および表彰根拠となった大会には、本支部大会の参加者数および発表者数と同規模のものが複数含まれている。以上のことから、本学生を学長表彰候補者として推薦いたします。</p>	第6回 日本食品科学工学会関西支部大会/ (2024/11/16)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、食品科学工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う支部大会です。</p> <p>【規模】 参加者数：120人 発表数：26件 受賞者数：4名</p>
農学研究科	花井 麻愛	はない まい	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「若手優秀発表賞」を受賞した。</p> <p>標題「励起蛍光マトリクスおよび並列因子分析を用いた糖化反応の解析」</p> <p>支部大会での受賞ではあるが、本学会が受け入れる学問分野の領域は広範で食品全般を対象としており、かつ研究成果発表のレベルは全国大会と同等である。その中には、海外の研究機関や全国規模の関連企業との共同研究も含まれている。また、支部の範囲は、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取、岡山、徳島、香川、高知と広い。さらに、過去の学長表彰の推薦および表彰根拠となった大会には、本支部大会の参加者数および発表者数と同規模のものが複数含まれている。以上のことから、本学生を学長表彰候補者として推薦いたします。</p>	第6回 日本食品科学工学会関西支部大会/ (2024/11/16)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、食品科学工学分野に関する研究成果の発表、議論を行う支部大会です。</p> <p>【規模】 参加者数：120人 発表数：26件 受賞者数：4名</p>

農学研究科	野上 凌介	のがみ りょうすけ	Journal of Pesticide Sciences に掲載された論文「Cycloheximide in the nanomolar range inhibits seed germination of Orobanche minor, vol 49, no. 1, 22-30, 2024, Ryuosuke Nogami, Mari Nagata, Risa Imada, Kenji Kai, Takashi Kawaguchi, Shuji Tani」がJournal of Pesticide Sciences の論文賞に選出された。本論文賞は、2023年vol4と2024 vol 1-3までに掲載された論文の中から厳正な選考を経て、1報に送られる賞である。野上凌介は、本論文の第一著者として研究の遂行と執筆を担ったため、学長表彰候補者として推薦する。	日本農薬学会	Journal of Pesticide Sciences, IF 2.4 in 2022; 日本農薬学会が発行する全文査読付きの学術誌。世界でも数少ない農業科学分野のSCIジャーナルとして、世界に認知されている。 野上は、2024年の1月に掲載された本論文の研究内容を、2024年6月に開催された国際学会 17th World Congress on Parasitic Plantsで発表するなど、研究発表にも努めた
農学研究科	福田 琳之介	ふくだ りんのすけ	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Presentation Awards for Young Scientists (PAYS)若手口頭発表賞」を受賞した。 ・ 標題「Population genetic structure of an endangered butterfly, <i>Leptidea amurensis</i> (Lepidoptera: Pieridae) in Japan using microsatellite markers」 ・ 内容 ヒメシロチョウの日本における遺伝構造をマイクロサテライトマーカーを用いて明らかにした	XXVII International Congress of Entomology 2024 (第27回国際昆虫学会議: ICE2024Kyoto), 2024年8月25-30日	【大会概要】 4年に1回、全世界から研究者が集い、昆虫分野に関する研究成果の発表、議論を行う国際学会です。 【規模】 参加者数: 3,700人 発表数: 2800件、176シンポジウム、29ポスターセッション 受賞者数: 若手研究者から若干名
獣医学研究科	高見 優生	たかみ ゆうき	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀発表賞」を受賞した。 ・ 標題「アルデヒド脱水素酵素2型遺伝子多型によるアリルアルコールおよびセトアミノフェン誘発肝毒性の感受性の比較解析」(口頭発表) 右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「Oral presentation awards」を受賞した。 ・ 標題「Aldh2*2 knock-in mice show different susceptibility to hepatotoxicity induced by allyl alcohol and acetaminophen」(口頭発表, 英語)	第167回日本獣医学会学術集会 (2024/9/10~13) 第4回東アジア合同獣医学会 The 4th Joint Meeting of Veterinary Science in East Asia (2024/9/8~9)	【大会概要】 年に1回、日本獣医学会が開催する、獣医学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数: 約1,500人 発表数: 724件(全て口頭発表) 受賞者数: 約35名 【大会概要】 東アジアの獣医学発展と獣医学研究者の交流の推進に資するために、日本獣医学会(JSVS)、韓国獣医学会(KSVS)、中国(台湾)獣医学会(CSVS)の3学会が合同で開催する国際学術集会です。また、大学院生や若手研究者に国際学会での発表の場を提供することを通じて、人材の育成に役立てています。これまで韓国と台湾での3回の開催(第1回2018年5月10-12日韓国・ソウル大学、第2回2019年4月25-26日韓国・建国大学、第3回2023年5月1-3日台湾・屏東科技大学)を経て、今回初めて日本で開催されました。 【規模】 参加者数: 約200人 発表数: 145件(ポスター発表含む) 受賞者数: 12名
リハビリテーション学研究科	大類 淳矢	おおるい じゅんや	右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀演題賞」を受賞した。 ・ 標題「手工芸に対する動機づけの違いが脳波と自律神経活動に与える影響」 ・ 内容: 本研究では、手工芸を行う際の利他的動機づけが前頭部脳活動や自律神経活動に与える影響を明らかにすることを目的とした。若年健康者15名を対象に、手工芸中の前頭部脳活動と自律神経活動を測定した結果、利他的条件では接近的動機づけの指標である左前頭部活動を高め、交感神経活動を低下させることが明らかになった。これらの結果は利他的手工芸のホリスティックな効果を電気生理学的に補強するものであり、作業療法の臨床場面での応用可能性を示唆するという点で評価を受けた。 なお上記の内容からさらに解析を追加した内容は、作業療法領域における国際学術誌であるHong Kong journal of occupational therapyにacceptされた。	第18回日本作業療法研究学会学術大会(2024年8月31日-9月1日)	【大会概要】 年に1回、作業療法分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数: 約200人 発表数: 約30件(シンポジウム含む) 受賞者数: 2名 (Orui, J., Shiraiwa, K., Inoue, T., Ueda, M., Ueno, K., Naito, Y., & Ishii, R. (in press). Neurophysiological effects of altruistically motivated craft activities in occupational therapy: A pilot study using frontal EEG and heart rate variability analysis. Hong Kong Journal of Occupational Therapy . doi: 10.1177/15691861251319466)

生活科学研究科	神野 隼平	かみの しゅんぺい	居住環境学分野 修士1回生 神野隼平さんの卒業設計研究の論文が国際学術誌Sustainabilityに掲載された。 掲載誌情報 雑誌名：Sustainability, Vo. 16, Issue 22, No. 9992 (2024) 論文名：Increase in Households Triggered by Accommodation Closure Due to the COVID-19 Pandemic in the Historical Center of Kyoto City 著者：Shunpei Kamino and Haruka Kato 掲載URL：https://doi.org/10.3390/su16229992	雑誌名：Sustainability, Vo. 16, Issue 22, No. 9992 (2024)	Sustainabilityは、人類の環境、文化、経済、社会の持続可能性に関する 国際的な査読付きオープンアクセスジャーナルで、MDPI によって隔月オンラインで発行されています。ジャーナルランク：JCR - Q2 (環境研究) / CiteScore - Q1 (地理、計画、開発)
生活科学研究科	明石 実久	あかし みく	「Paris Region 2024 France Paris-Cergy workshops」に参加するために、テーマに沿った個人作品を提出し、100を超える応募の中から選出された。 世界各国から都市計画分野の学生や若手専門家15名が選出され、国際的な専門家やパートナーとともに、パリ郊外セルジーポントワーズ大学で、2週間弱の国際ワークショップに参加した。ワークショップでは各国参加者とチームを組んで活動し、その成果を国際審査委員会の前で発表した。 https://www.omu.ac.jp/life/matsushita/info/news/entry-66568.html https://ateliers.org/media/library/Cahier_session_Y24V2-ENI.pdf	国際ワークショップ名称 Paris Region 2024 France Paris-Cergy workshops テーマ Inhabit! Cohabit! Reinhabit! Metamorphosis of habitat in response to the ecological and social emergency	Les Ateliersは1982年に設立されたフランスの非営利団体で、世界各地で専門家、学生、若手専門家など、さまざまな国や背景を持つ世界各国の人々を集め、都市開発に関する国際ワークショップを開催する活動を行っている。「Paris Region 2024 France Paris-Cergy workshops」は、設立以来毎年9月に開催されている国際都市ワークショップであり、セルジー・ポントワーズ市、ヴァル・ドワーズ県、地域都市計画研究所、都市計画省、パリ地方金融公社などが後援している。セルジー・ポントワーズ大学、エセック・ビジネススクール、セルジー・パリ美術学校などの高等教育機関とも提携している。
生活科学研究科	鈴木 侑佳	すぎき ゆうか	下記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「若手学会発表賞」を受賞した。 ・ 標題「健診受診者における塩分チェックシートとスポット尿中Na/K比・食塩排泄の関連」 ・ 内容：ある町で実施された特定健康診査を受診した住民のうち、研究に同意し者を対象に、検尿検査の残りをを用いたスポット尿中Na/K比測定とアンケート形式の塩分チェックシートへの回答を依頼した。両者の結果を用いることで、詳細な食事調査を行わなくても、特定健康診査の実施当日に、高血圧を始めとした循環器疾患予防に関する客観的で適切な栄養・保健指導を実施できる可能性が示唆された。 ・ 評価を受けた点：本検討内容の実行可能性を含めたテーマ設定や考察、プレゼンテーションの内容について、評価を受けた。	第71回 日本栄養改善学会学術総会 (2024/9/7)	【大会概要】 年に1回、実践的な栄養学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。 【規模】 参加者数：2,200人 発表数：565件（ポスター発表含む） 受賞者数：6名（若手学会発表賞）
生活科学研究科	高橋 明弓	たかはし あゆみ	「2024 年度日本建築学会大会（関東）学術講演会 建築計画 部門 若手優秀発表賞」を受賞しました。 ・ 発表タイトル「低未利用地の利活用のための分析 滋賀県草津市をケーススタディとして」 ・ 2024 年度日本建築学会大会（関東）学術講演会での研究発表がとくに優秀なものとして認められたため。 https://www.omu.ac.jp/life/info/news/entry-16205.html https://www.aij.or.jp/jpn/symposium/2024/24j000.pdf	2024 年度日本建築学会大会（関東）学術講演会 (2024/8/27-30)	【大会概要】 日本建築学会は、建築学の専門分野別に16の常置調査研究委員会を設置し、さらにそれらのもとに約560の小委員会、ワーキンググループを設けて、延べ7,000名の委員が年間約2,300回の会合を開いて専門的な調査研究活動を行っています。 大会は、会員が一堂に会し、最新の学術・技術情報を交換する本会最大の催しで、毎年一度開催されます。その中で、学術講演会は会員の研究発表の場です。
生活科学研究科	安田 珠実	やすだ たまみ	「蒲郡BENCH ART PROJECT学生チャレンジコンペ2024」にて優秀作品賞を受賞しました。 ・ 作品「みかんのじゅんかん」 ・ 国内外から応募された101作品のうち、5作品が一次審査を通過し、5組が公開でプレゼンテーションを行った結果、優秀作品賞を受賞しました。 https://www.city.gamagori.lg.jp/unit/kanko/bench-second.html	蒲郡BENCH ART PROJECT学生チャレンジコンペ2024（令和6年9月28日実施）	【コンペ概要】 アート作品としてのベンチを設置していくプロジェクト『ベンチアートプロジェクト』は次世代を担う学生応援企画。国内外の建築やデザインを学ぶ学生が集まり、竹島の対岸に設置する「ベンチ」の設計案101作品から、一次審査を通過した5組の作品について公開でプレゼンテーションが行われました。 【規模】 応募作品数：101作品（延べ24人） 応募登録数：155組
生活科学研究科	西 太郎	にし たろう	下記の学会において行った発表が優れた内容であると評価を受け「若手学会発表賞候補演題 実務者部門（口演）優秀賞」を受賞した。 ・ 標題「公衆栄養学臨地実習前後評価の必要性（G-1-01A）」 ・ 内容：管理栄養士養成課程では4単位の臨地実習が必要であり、奈良県でも「公衆栄養学」実習として学生を毎年受け入れている。県保健所等の受け入れ側も体制を評価し、改善に努めることが重要であると考え、実習の前後比較でアンケート調査を実施した。 ・ 評価を受けた点：学生が実習を通して評価されるだけでなく、受け入れ体制として体制を整えるための取組が評価された。また、今後は県保健所だけでなく、市町村へも展開することで、受け入れ施設が実習体制の標準化を図れる点で意義がある。	第71回 日本栄養改善学会学術総会/ (2024/9/7)	日本栄養改善学会 【大会概要】 年に1回、実践栄養分野における研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。管理栄養士養成課程のほとんどの大学の研究者が参加する実践栄養分野で最も大きな学会です。 【規模】 参加者数：約2200人 受賞者数：若手学会発表賞候補演題 実務者部門（口演）優秀賞4名 最優秀賞1名

【大阪市立大学】

学部・学科 Faculty・Department 学域・学類 College・School 研究科 Graduate school	氏名 Name	ふりがな Furigana	推薦理由・成績（功績の内容） Reasons for Recommendation	【学会等における受賞等の場合に記入】 国際大会または国内大会 International competition or National competition ／（開催年月日 date）	その他参考事項 Others ※学術誌であれば、タイトルや大会の規模・概要などを記載してください If it is an academic journal, please include the title, scale and outline of the conference, etc.
理学研究科	檜原 友	ならはら とも	檜原友氏と本学の古澤昌秋名誉教授の共著が右記の学術誌に出版されました。掲載された論文では、余接ゼータ関数の特殊値に関するBerndtと荒川恒男氏の公式に独創的かつ簡便な別証明を与えています。証明のアイデアは檜原氏の発案であり、古澤教授は論文に書き上げる段階で協力しました。		【掲載誌】 Research in Number Theory (2025) 11:18 Springerの国際学術誌であり、査読付きです。 【タイトル】 On a certain identity for the cotangent finite Dirichlet series and its application to the Berndt-Arakawa formula (https://doi.org/10.1007/s40993-024-00608-4)
工学研究科	L I SHUYANG	り しょう	筆頭著者である学術論文（査読付き）1編が都市計画学会の学術誌に採択、掲載された。学会の全国大会にて口頭発表を行った。口頭発表を行った学会の大会名称を右に記す。 ・論文の内容：市街化調整区域の土地利用調整に関する独自条例を運用している神戸市について、市街化調整区域内の農村集落を対象とし、農地転用と開発許可の状況、集落の立地状況、住民による集落維持活動への関りから、集落ごとの土地利用実態を総合的に解明した。	日本都市計画学会 2024年度全国大会（第59回論文発表会） (2024/11/1-3)	【著者】 李書陽・神出直幸・高木悠里・嘉名光市 【標題等】 『神戸市市街化調整区域における「人と自然との共生ゾーン」の土地利用実態に関する研究 - 「里づくり計画」の策定状況、農地転用と開発許可の動向の分析を通じて』、日本都市計画学会、都市計画論文集、59(3), pp1469-1476, 2024年10月。 【全国大会の概要・規模】 年に1回開催、発表件数150編程度
生活科学部	松本 恵利香	まつもと えりか	（デザイン部門） 産学官民一体のまち丸ごとスポーツジム化計画 生活科学部 居住環境学科（松本恵利香、北村和津） JR阪和線美章園駅～杉本町駅沿いの未利用地を活用し、老若男女問わず幅広い層がスポーツに参加しやすくなるよう、エリアごとに具体的なプランを提案した。	スポーツ・健康まちづくりデザイン 学生コンペティション2024	【コンクール概要】 スポーツ庁主催の「スポーツ・健康まちづくりデザイン 学生コンペティション2024」に松本恵利香さんと北村和津さんのチームが応募し、スポーツ庁長官賞（デザイン部門最優秀賞）を受賞しました。 https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop02/list/1380329_00020.htm https://www.omu.ac.jp/info/news/entry-16242.html
生活科学部	北村 和津	きたむら かず	同上	同上	同上

他1名

【大阪府立大学】

学部・学科 Faculty・Department 学域・学類 College・School 研究科 Graduate school	氏名 Name	ふりがな Furigana	推薦理由・成績（功績の内容） Reasons for Recommendation	【学会等における受賞等の場合に記入】 国際大会または国内大会 International competition or National competition ／（開催年月日 date）	その他参考事項 Others <small>※学術誌であれば、タイトルや大会の規模・概要などを記載してください If it is an academic journal, please include the title, scale and outline of the conference, etc.</small>
現代システム科学域	岡山 颯太	おかやま そうた	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「最優秀プレゼンテーション賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「RoboCup サッカーシミュレーション 2D リーグにおける 環境構築ツールの開発」 	人工知能学会 「社会におけるAI研究会 第50回研究会」 (RoboCupシミュレーションリーグ秋キャンプ) (2024/11/30)	<p>【共著者】 藤川 拓海 楠木 祥文 中島 智晴 秋山 英久（岡山理科大学）</p> <p>【大会概要】 RoboCupに関する研究成果を発表する年次研究会です。</p> <p>【規模】 発表数：8件 受賞者数：2名</p>
工学研究科	木村 拓哉	きむら たくや	<p>右記の論文が国際的学術誌『Journal of the Ceramic Society of Japan』に掲載された。</p> <p>『Journal of the Ceramic Society of Japan』は、日本セラミックス協会が発行する査読付き国際的学術誌で、セラミックスおよび関連材料の化学と技術に関する研究論文を掲載している。</p>		<p>【論文詳細】 "Solid Electrolyte Na3AsS4 with High Conductivity and Moisture Tolerance Synthesized by Mechanochemical Process" T. Kimura, C. Okushima, A. Sakuda, M. Tatsumisago and A. Hayashi J. Ceram. Soc. Jpn., 133 [1] 44-46 (2025). https://doi.org/10.2109/jcersj2.24095 Accepted: Oct.18, Published: Jan.1</p>
生命環境科学域	木下 綾	きのした りょう	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「優秀講演発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「絶滅危惧種ゲンバイトンボの季節消長と繁殖行動」 ・ ゲンバイトンボの季節消長などの基礎的な生活史を記録するとともに、野生個体に対して生体の提示実験を行い、繁殖行動における脛節の役割を検証した。 	第36回日本環境動物昆虫学会年次大会 (2024/11/16-2024/11/17)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、昆虫および動物分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：93人 発表数：36件（ポスター発表含む） うち受賞対象発表数：14件 受賞者数：3名、うち優秀講演発表賞3名 同一カテゴリー内では、8件中1件受賞</p>

生命環境科学域	今井 咲帆	いまい さきほ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「日本獣医学会学術集会優秀発表賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「GおよびM遺伝子を欠損した新規ポルナウイルスの発見」 ・ 内容：大規模なデータ解析により、脊椎動物に感染する多数の新規ポルナウイルスを発見した。発見したウイルスのうち、一部のウイルスはウイルスの増殖・感染伝播に必須と考えられている遺伝子を欠損しており、これまでのウイルス学の常識を覆す新たなウイルス複製機構を提唱した。また、発見したウイルスの一部はこれまでに前胃拡張症という病気と関係があると考えられていたウイルスと共感染しており、発見したウイルスも前胃拡張性に関与する可能性も考えられ、獣医学的にも極めて重要な発見である。 	第167回日本獣医学会/ (2024/9/10)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、獣医学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。学会は多数の分科会に分かれており、各分科会において選出されます。今井さんは最も発表者数の多い微生物分科会にて発表し、受賞しました。特筆すべきは、受賞資格は「2024年4月1日時点で37歳未満」であり、大学院生、ポスドク、若手～中堅教員なども受賞資格がある中、学部生が受賞したということです。</p> <p>【規模】 参加者数：200人程度（微生物分科会のみ） 発表数：64件（微生物分科会の対象演題のみ） 受賞者数：8名</p>
生命環境科学研究科	吉田 拓海	よしだ たくみ	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「日本獣医学会学術集会優秀発表賞受賞者」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「体外受精由来胚盤胞を用いたネコES細胞株の樹立」 ・ 内容：体外受精により作製した胚盤胞（受精卵）から内部細胞塊を分離し、ヒト多能性幹細胞用培地「StemFit AK02N」で培養することで、ネコ胚性幹（ES）細胞を世界で初めて樹立した。 <p>さらに同内容の研究は2024年12月に学術誌Regenerative Therapyに掲載され、本学でプレスリリースされると共に研究内容が読売新聞社に掲載された。</p>	第167回 日本獣医学会学術集会/ (2024/9/10-13)	<p>【大会概要】 年に1回、産官学を問わず、獣医学分野に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会です。</p> <p>【規模】 参加者数：2,000人 発表数：750件（うち、繁殖分科会40件）受賞者数：42名（うち、繁殖分科会2名）</p> <p>【学術雑誌】 Regenerative Therapy タイトル：Establishment of feline embryonic stem cells from the inner cell mass of blastocysts produced in vitro</p>
生命環境科学域	二宮 蒼平	にのみや そうへい	<p>右記の学会において行った発表が、優れた内容であると評価を受け「学生賞」を受賞した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標題「膜透過性ペプチドのインクジェット精密吐出とサイトゾル移行評価」 ・ 内容：インクジェット装置と膜透過性ペプチド（cell-penetrating peptides, CPPs）を用いた新たな細胞内導入技術の開発（Inkje-CPP system） ・ 評価を受けた点：標的がん細胞群へのインクジェット装置を用いた精密な狙い撃ちと、高効率な薬剤のサイトゾル導入が可能な画期的な薬物送達技術であり、通常なら細胞膜を透過できない高分子薬物を細胞内へ送達できる医療応用性の高い技術として評価を受けた。 	日本膜学会 膜シンポジウム2024 (2024年11月28-29日)	<p>【大会概要】 膜分野（生体膜・人工膜・境界領域）に関する研究成果の発表、議論を行う全国規模の学会（年に1回、産官学を問わず）。膜シンポジウム 2024 の主題は“融合による創膜”であり、日本膜学会の特徴である 異分野(人工膜・生体膜・境界領域)からの様々な研究者が 根を越えて深く議論することで 各々の視点や技術が 融合し、新たな“創膜”へと結び ことを 目的としている。</p> <p>【規模】 参加者数：200人 発表数：119件（内、ポスター発表81件） 受賞者数：14名（学生賞）</p>

<団体>

【大阪公立大学】

団体名 Name of Team	構成員氏名(代表者に○) Member's Name (Representative, ○) ふりがな Furigana	学部・学科 Faculty・ Department 学域・学類 College・School 研究科 Graduate school	推薦理由・成績(功績の内容) Reasons for Recommendation.	【学会等における受賞等の場合に記入】 国際大会もしくは国内大会 International competition or National competition ／(開催年月日 date)	その他参考事項 Others ※学術誌であれば、タイトルや大会の規模・概要などを記載してください If it is an academic journal, please include the title, scale and outline of the conference, etc.
-	尾崎 大晟 (おさき たいせい) 天野 祥太郎 (あまの しょうたろう)	工学研究科	右記大会は、年1度開催され、一般の研究発表の他、招待講演なども行われます。 本チームは、「LLMによる前提生成ステップを用いた反論の攻撃力向上手法」を発表し、一般セッション口頭発表部門において、全国大会優秀賞を受賞した。 【規模】 参加者数：約3,790名（内現地参加約2,900名，社会人約3,010名，学生約780名）の方々が本大会に参加されました（招待講演者やスポンサー聴講参加特典の参加者は含みませんが、企画セッション限定登壇者，報道参加者ならびに一般公開セッション参加者は含みません）。 発表数：国際／一般／ポスター／OSでの発表件数は合計946件（OS招待講演8件を含む） 受賞者数：一般セッション口頭発表部門 9件、ポスター発表部門 12件、オーガナイズドセッション口頭発表部門 9件、国際セッション部門 1件	2024年度人工知能学会全国大会（第38回）/一般セッション高等発表部門/ (2024/7/24)	https://www.ai-gakkai.or.jp/jsai2024/ 受賞者 https://www.ai-gakkai.or.jp/about/award/jsai_award-conf/#CONFERENCE 前期対象期間内に根拠資料とする賞状が手元に届かず、前期表彰に推薦できなかった